

井上小松山遺跡3・4

小郡市文化財調査報告書第227集

2007

小郡市教育委員会

いの うえ こ まつ やま
井上小松山遺跡3・4

—福岡県小郡市井上所在遺跡の調査報告—
小郡市文化財調査報告書第227集

2007

小郡市教育委員会

いの うえ こ まつ やま
井上小松山遺跡3・4

—福岡県小郡市井上所在遺跡の調査報告—
小郡市文化財調査報告書第227集



2007

小郡市教育委員会



井上小松山遺跡 3 1号竪穴住居出土遺物



井上小松山遺跡4 出土遺物

序

これまで小郡市では、北部丘陵における大規模なニュータウン開発や、小郡駅前再開発、工業団地建設などにより経済的な発展を遂げてきました。また、街並みの発展をうけて交通網も整備され、住みよい街づくりが進められてきました。そうした開発に伴う発掘調査では、貴重な考古学的発見が相次ぎ、全国的にも広く認識されることとなっております。

ここに報告いたします「井上小松山遺跡3・4」は、市道「大保・今隈10号線」道路改良工事に先立って行った埋蔵文化財の発掘調査によるものです。今回の調査では、弥生時代から古代にいたるまで、集落や祭祀土坑など様々な性格の遺構を確認することができ、非常に価値ある調査となりました。

発掘によって明らかとなった成果は、決して教科書に載ることのない「小郡市の歴史」そのものです。遺跡自体は二度と見ることはできませんが、この報告書を通じてその歴史の一端を垣間見ていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しましては地元井上区の皆様と、道路建設課をはじめとする関係諸機関に多大なる御協力と御理解を賜りましたことを、心より感謝申し上げます。

平成19年3月31日

小郡市教育委員会

教育長 清 武 輝

例 言

1. 本書は、小郡市井上字尾辺田434-5、472-4・9・10・11に所在する井上小松山遺跡3・4において、小郡市道路建設課による市道「大保・今隈10号線」道路改良工事に伴う発掘調査を、平成17年度に小郡市教育委員会が予算の執行委任を受けて行った際の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は、井上小松山遺跡3については下原幸裕・廣木誠・山本絹子・横田雅江が、井上小松山遺跡4については上田恵・山本・横田が行った。遺物の実測は調査担当者および柿本慈、中島圭、中村智恵子、吉田あや子が行い、製図は馬田妙子、熊本啓子、吉田が行った。
なお、調査区内の測量と遺構実測の一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に委託した。
3. 本書に掲載した遺構の写真は下原・上田が撮影し、遺物の写真は有限会社文化財写真工房に委託した。
また、遺跡の航空写真は九州航空株式会社に委託した。
4. 本書で使用した座標は国土座標第II系に拠っており、遺構図中の北は座標北を示す。
5. 図版中の遺物に付されている番号は、本文中の挿図番号に対応する。
6. 本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。
7. 本書で用いた遺構略号はB（掘立柱建物）、C（住居）、K（土壙）、P（ピット）、X（不明遺構）である。
8. 本書に掲載した測量図、遺構実測図、遺物実測図、写真は、すべて小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。
9. 本書の執筆は下原・上田が、編集は杉本岳史と上田が行った。

本文目次

I. 調査の経過と組織

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	2

II. 位置と環境

1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3

III. 井上小松山遺跡3の調査の内容

1. 調査の概要	8
2. 遺構と遺物	
(1) 弥生時代の遺構	
a. 祭祀土坑	8
b. 土坑	13
c. ピット	15
d. 不明遺構	16
(2) 古墳時代の遺構	
a. 竪穴住居	17
b. 掘立柱建物	26
(3) 古代の遺構	
火葬墓	27
(4) その他の遺物	27
3. 考察	
(1) 火葬墓出土人骨の鑑定	28
(2) 火葬墓の検討	30

IV. 井上小松山遺跡4の調査の内容

1. 調査の概要	33
2. 遺構と遺物	33

V. 調査成果のまとめ

1. 井上小松山遺跡3について	44
2. 井上小松山遺跡4について	45

挿図目次

第1図	調査地位置図 (S=1/2500) ……2	第14図	4・5号竪穴住居実測図 (S=1/50) ……23
第2図	周辺遺跡分布図 (S=1/25000) ……5	第15図	2～4号竪穴住居出土遺物実測図 (S=1/3) ……24
第3図	井上小松山遺跡3 遺構配置図 (S=1/350) ……6・7	第16図	4・5号竪穴住居出土遺物実測図 (S=1/3) ……25
第4図	祭祀土坑 (K7・K10) 実測図 (S=1/20) ……10	第17図	1号掘立柱建物実測図 (S=1/60) ……26
第5図	祭祀土坑出土遺物実測図 (1) (S=1/4) ……11	第18図	火葬墓及び骨蔵器実測図 (S=1/20,1/3) ……27
第6図	祭祀土坑出土遺物実測図 (2) (S=1/4,1/6) ……12	第19図	表採遺物実測図 (S=1/2,1/3,1/4) ……27
第7図	1～6・8・9・11・12号土坑実測図 (S=1/40) ……14	第20図	井上小松山遺跡4 遺構配置図 (S=1/250) ……34
第8図	13～17号土坑実測図 (S=1/40) ……15	第21図	円形竪穴住居実測図 (S=1/40) ……35
第9図	土坑・ピット出土遺物実測図 (6・9はS=1/2,4は1/3,その他は1/4) ……16	第22図	円形竪穴住居出土遺物実測図 (S=1/4) ……37
第10図	不明遺構及び出土遺物実測図 (S=1/40,1/4) ……17	第23図	1～7号土坑実測図 (S=1/40) ……38
第11図	1号竪穴住居実測図 (S=1/50) ……19	第24図	土坑・落とし穴状遺構出土遺物実測図 (S=1/4) ……40
第12図	1号竪穴住居出土遺物実測図 (S=1/3) ……20	第25図	落とし穴状遺構実測図 (S=1/30) ……41
第13図	2・3号竪穴住居実測図 (S=1/50) ……21	第26図	井上小松山遺跡4 出土縄文土器 (S=1/2) ……43

図版目次

図版1	①井上小松山遺跡3 調査区遠景 (東から) ②井上小松山遺跡3 調査区全景 (直上から、写真上方が南)	②3号竪穴住居 完掘状況	
図版2	①竪穴住居集中箇所 (直上から) ②竪穴住居集中箇所 (南東から)	③4号竪穴住居 土層断面	
図版3	①1号祭祀土坑 遺物出土状況 ②1号祭祀土坑 完掘状況 ③2号祭祀土坑 遺物出土状況 ④2号祭祀土坑 完掘状況 ⑤6号土坑 土層断面 ⑥6号土坑 完掘状況 ⑦8号土坑 土層断面 ⑧8号土坑 完掘状況	④4号竪穴住居 完掘状況 ⑤4号竪穴住居 遺物出土状況 ⑥5号竪穴住居 検出状況 ⑦5号竪穴住居 完掘状況 ⑧5号竪穴住居 遺物出土状況	
図版4	①3号土坑 土層断面 ②3・4号土坑 完掘状況 ③5号土坑 土層断面 ④5号土坑 完掘状況 ⑤6号土坑 土層断面 ⑥6号土坑 完掘状況 ⑦8・9号土坑 検出状況 ⑧8号土坑 土層断面	図版8	①掘立柱建物 検出状況 ②掘立柱建物 完掘状況 ③掘立柱建物 土層断面 (1) ④掘立柱建物 土層断面 (2) ⑤掘立柱建物 土層断面 (3) ⑥掘立柱建物 土層断面 (4) ⑦火葬墓 完掘状況 ⑧火葬墓 遺物出土状況
図版5	①9号土坑 土層断面 ②10号土坑 検出状況 ③11号土坑 土層断面 ④12号土坑 土層断面 ⑤13号土坑 土層断面 ⑥14号土坑 土層断面 ⑦15号土坑 土層断面 ⑧20号土坑 土層断面	図版9	井上小松山遺跡3 出土遺物 (1)
図版6	①不明土坑 土層断面 ②不明土坑 完掘状況 ③1号竪穴住居 検出状況 ④1号竪穴住居 完掘状況 ⑤1号竪穴住居屋内土坑 遺物出土状況 ⑥1号竪穴住居屋内土坑 完掘状況 ⑦2号竪穴住居 遺物出土状況 ⑧2号竪穴住居 完掘状況	図版10	井上小松山遺跡3 出土遺物 (2)
図版7	①3号竪穴住居 掘削状況	図版11	井上小松山遺跡3 出土遺物 (3)
		図版12	①井上小松山遺跡4 調査区全景 (南東から) ②井上小松山遺跡4 調査区全景 (直上から)
		図版13	①円形竪穴住居 土層断面 ②円形竪穴住居屋内土坑 土層断面 ③円形竪穴住居屋内土坑 遺物出土状況 ④円形竪穴住居 遺物出土状況 (1) ⑤円形竪穴住居 遺物出土状況 (2) ⑥円形竪穴住居 完掘状況 ⑦1号土坑 土層断面 ⑧1号土坑 完掘状況
		図版14	①2号土坑 遺物出土状況 ②2号土坑 土層断面 ③1号落とし穴状遺構 土層断面 ④1号落とし穴状遺構 完掘状況 ⑤2号落とし穴状遺構 土層断面 ⑥調査区北西斜面 遺構検出状況 ⑦調査区から下鶴の集落を臨む ⑧調査風景
		図版15	井上小松山遺跡4 出土遺物 (1)
		図版16	井上小松山遺跡4 出土遺物 (2)

I. 調査の経過と組織

1. 調査に至る経緯

井上小松山遺跡3・4の調査は、小郡市井上字尾辺田における市道「大保・今隈10号線」改良工事に先立ち、小郡市都市建設部道路建設課より小郡市教育委員会に対して埋蔵文化財の有無について照会があったことに始まる（審査番号05063）。照会を受けて平成17年8月8日に試掘調査を行った結果、地表下30～50cmの深さより遺構が確認されたため、埋蔵文化財に関する調整が必要となった。

協議の結果、改良工事実施予定箇所全体の発掘調査を実施することとなり、字尾辺田472-4・9・10・11および434-5の一部については平成17年度、434-5の残地については平成18年度に調査を行い、平成18年度事業として双方の発掘調査報告書を刊行することで同意を得た。また、調査地及びその周辺は元々福岡県甘木農林事務所が管理する試験林であり、調査に伴って発生する廃土については場外搬出が極めて困難であったことから、同事務所との協議により隣地に仮置きすることで快諾を得た。

2. 調査の経過

発掘調査は平成17年9月から18年12月にかけて、延べ7ヵ月にわたって実施した。調査対象地はいずれも試験林で、遺構面が現地表面から比較的浅かったことから、調査において検出された遺構の多くは根攪乱に切られている状態であった。遺構検出段階で明らかに樹木根の痕跡と判断できるものは若干の掘り下げで留め、平面で樹木根跡が明確な遺構を切っていることが確認できた場合のみ、樹木根跡を完掘して、のち遺構の調査を行なった。以下、調査の経過を調査日誌から抜粋して記す。

<井上小松山遺跡3>

平成17年9月13日調査開始、調査対象地は、便宜的に調査区の東側をA区、西側をB区として分割し、順次掘り進めることにする。16日重機を搬入してA区の表土剥ぎを開始、しかし東端部は大規模な造成により谷部を埋めていることが判明したため、状況を写真撮影して埋め戻し、造成の及んでいない範囲のみの調査を実施。26日A区の発掘作業員による遺構の検出と掘り下げを開始（以後随時検出遺構の掘り下げと個別遺構図の作成・写真撮影を進める）。30日竪穴住居群の掘り下げを開始。10月25日調査区全景写真撮影に向けての清掃（～26日）。27日A区全景写真撮影。31日重機によるB区の表土剥ぎを開始（～11月1日）。2日B区の発掘作業員による遺構の検出・掘り下げを開始（以後随時検出遺構の掘り下げを進める）、併行してA区の詳細遺構実測業務を進める（～9日）。29日A・B区の調査区全景写真撮影のための清掃。12月3日調査区全景写真撮影。4日調査担当者による個別遺構図の作成、詳細遺構実測業務を進める（～11日）。12日調査区埋め戻し開始（～14日）。14日全ての機材撤去完了、現場を小郡市役所都市建設部道路建設課に引き渡し。

<井上小松山遺跡4>

平成18年10月1日調査開始、調査対象地の北西端が崖状に落ち込んでいるため、まず平地部分を先行して調査することになる。4日重機を搬入し表土剥ぎを開始、6日表土剥ぎ完了、機材搬入。10日発掘作業員による遺構の検出と掘り下げを開始（以後随時検出遺構の掘り下げと個別遺構図の作成・写真撮影を進める）。17日台風により隣接する県有林の樹木が調査区へ向かって倒れていたため、県甘木農林事務所と協議、遺構の掘り下げが完了するまでに撤去することで同意。20日竪穴住居の掘り下げ開始。11月8日市道大保今隈10号線の調査区近辺と交差する立石下鶴4080号線改良工事予定地の試掘調査を実施、一部で遺構の存在を確認する。12月4日全景写真撮影のための清掃。5日調査区全景写真撮影。6日詳細遺構図化業務開始（～11日）。15日北西端の崖面へ重機を搬入、表土を剥い

で遺構検出を行ったが、土器・瓦片を採取したのみで明確に遺構と判断できるものは確認されなかった。18日全ての機材を撤去、現場を小郡市役所都市建設部道路建設課に引き渡し

現地調査終了後は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて図面整理と出土した遺物の整理作業を行った。文化財課が扱う他事業との兼ね合いから、遺物整理と調査報告書の作成・編集は平成18年度事業として行い、同年度に刊行した。

3. 調査組織

調査にかかる組織は以下のとおりである。

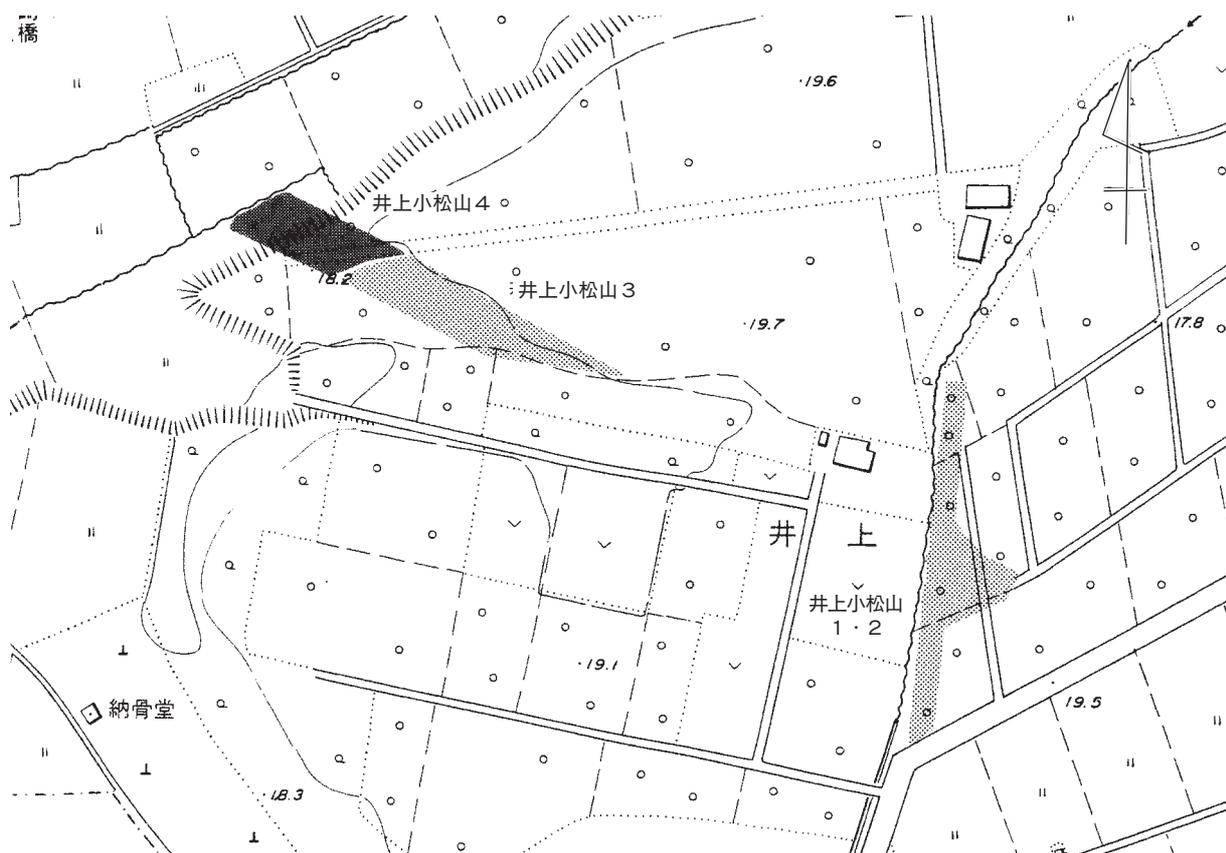
小郡市都市建設部

部 長 組坂弘幸
道路建設課長 佐藤吉生
道路2係長 松井秀章
井手 渡
山口浩一

小郡市教育委員会

教 育 長 清武 輝
教 育 部 長 高木良郎
文化財課長 田籠千代太
係 長 片岡宏二
技 師 上田 恵
嘱託技師 下原幸裕

〔発掘作業員〕 池田和子、古賀スマ子、重松栄子、高松ヨシエ、中原佐代子、野田美根子、花田直恵、廣木誠、松本スマ子、森本智慧子、山本絹子、横田雅江



第1図 調査地位置図 (S=1/2500)

II. 位置と環境

1. 地理的環境

井上小松山遺跡3・4は、小郡市を東西に二分するように南流する宝満川の左岸にある。花立山(標高130.6m)よりなだらかに南西方向へ広がる標高16.50mほどの洪積台地(中位段丘)上に位置する。

遺跡のすぐ西側には段丘崖があり、植林の間からは宝満川の周囲に広がる水田地帯を臨むことができる。北東側から西側にかけては宝満川の支流である鎗巻川が流れ、南側にはかつては小さな開析谷が存在したので、尾根状にのびる台地の先端部付近に位置することになる。

2. 歴史的環境

井上地区を中心に弥生時代から古代にかけての遺跡を概観する。

弥生時代では、**井上廃寺**で前期の住居・溝・貯蔵穴・ピット、中期末～後期初頭の甕棺墓群、後期～終末の住居群、後期前半の周溝状遺構などが発見された。また、**上岩田遺跡**では前期初頭～中期末の甕棺墓、中期後半～後期の竪穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構・溝などが確認されている。なお、**井上村岡遺跡**では前期の土器が採取されている。

井上薬師堂遺跡では、中期～後期の住居と中期末～後期初頭の周溝状遺構が検出された。さらに、**井上北内原遺跡**からは、中期前半～古墳時代初頭の住居30軒余、土坑、祭祀土坑、周溝状遺構で構成される集落が確認され、中期後葉～後期初頭の甕棺墓・土壙墓・石蓋土壙墓も多数発見された。ちなみに、**井上北口遺跡**は分布調査で弥生時代から古墳時代に至る遺物が採取されている。

古墳時代の集落としては**井上薬師堂遺跡**が古く、弥生時代末～古墳時代前期の竪穴住居跡群が確認されたが、その後は中期から後期にかけて空白期があり、7世紀になって再び集落が営まれる。中期の集落は周辺でも確認されておらず、後期になって再び事例が認められる。**井上北内原遺跡**では、6世紀の集落が形成され、竪穴住居7軒、掘立柱建物1棟が営まれる。**井上廃寺**では後期の溝が発見され、6～7世紀にかけての竪穴住居も確認された。**上岩田遺跡**でも6世紀後半ごろの竪穴住居が確認され、奈良時代まで継続する。

一方、当時の古墳に目を向けると、前期に**下鶴古墳**や**下岩田古野古墳**が営まれるが中期の古墳はなく、後期になって6世紀前半に**上岩田古墳**(上岩田遺跡)、6世紀後半に**西下野1号墳**などが築造される。これ以後は花立山山麓一帯に**花立山古墳**(墳長約33mの前方後円墳)をはじめとする高塚古墳や横穴墓が群集して営まれる。下岩田古野古墳が中期に下る可能性はあるが、やはり墳墓も中期が空白期になるようである。

古代になると周辺で多くの遺跡が確認できる。**上岩田遺跡**(国指定史跡)からは、瓦葺建物の基壇をはじめ、御原評衙と推定される建物群、竪穴住居、掘立柱建物、道路状遺構、柵列、土取り穴、火葬墓5基、土壙墓、木棺墓などが発見され、古瓦、墨書・刻書土器、円面硯、製塩土器、土馬、石帯、鉄製品、鉄滓、鞆羽口など多様な遺物が出土した。官衙は、郡衙成立時に**小郡官衙遺跡**(小郡遺跡)へ移ると推定されている。

井上廃寺では基壇・盛土・溝などが検出され、古瓦や墨書土器を含む多量の土器のほか、石帯(巡方)も出土した。瓦の検討から7世紀末ごろに建立され、少なくとも8世紀中頃まで機能していたと推定される。なお、**北薬師堂遺跡**や**北大門遺跡**でも井上廃寺と関連する古瓦が表採され、古代遺跡の広がりも推定されている。**井上南内原遺跡**と**井上東山ノ後遺跡**でも関連する古瓦が出土した。

薬師堂東遺跡・井上南内原遺跡・井上東山ノ後遺跡では、竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑などからなる7～8世紀の集落が営まれ、とくに薬師堂東遺跡からは道路状遺構や馬骨埋納遺構、土器棺墓（平安期）など多様な遺構が発見された。同時期の集落には上岩田天神木遺跡があり、吹上北畠遺跡では奈良～平安時代の土坑が発見された。なお、井上薬師堂谷遺跡では大溝から、土器とともに大量の木製品、木簡、山田寺系の瓦、墨書土器、ヘラ書き土器などが出土した。また、馬骨を用いた刻骨も出土し、6世紀後半～8世紀にかけて断続的に「水辺のまつり」が行われたと推定されている。

井上小松山遺跡1では奈良時代の土壙墓が発見され、当時の墓域であった可能性も考えられる。ここでは、部分的に被熱による赤化がみられる長方形土坑が3基確認されている。同様の遺構は上岩田遺跡11地区でも検出された。また、薬師堂東遺跡では7世紀から9世紀（ないし10世紀前半）までの土壙墓が10基程検出され、うち1基は壁面が被熱で赤変し、炭化材や炭化物が出土し、火葬墓の可能性も報告されている。

以上、周辺の遺跡を概観したが、依然として明らかになっていないことも多く、今後の調査が期待される。なお、各遺跡の調査報告書・参考文献に関しては紙幅の都合上割愛した。



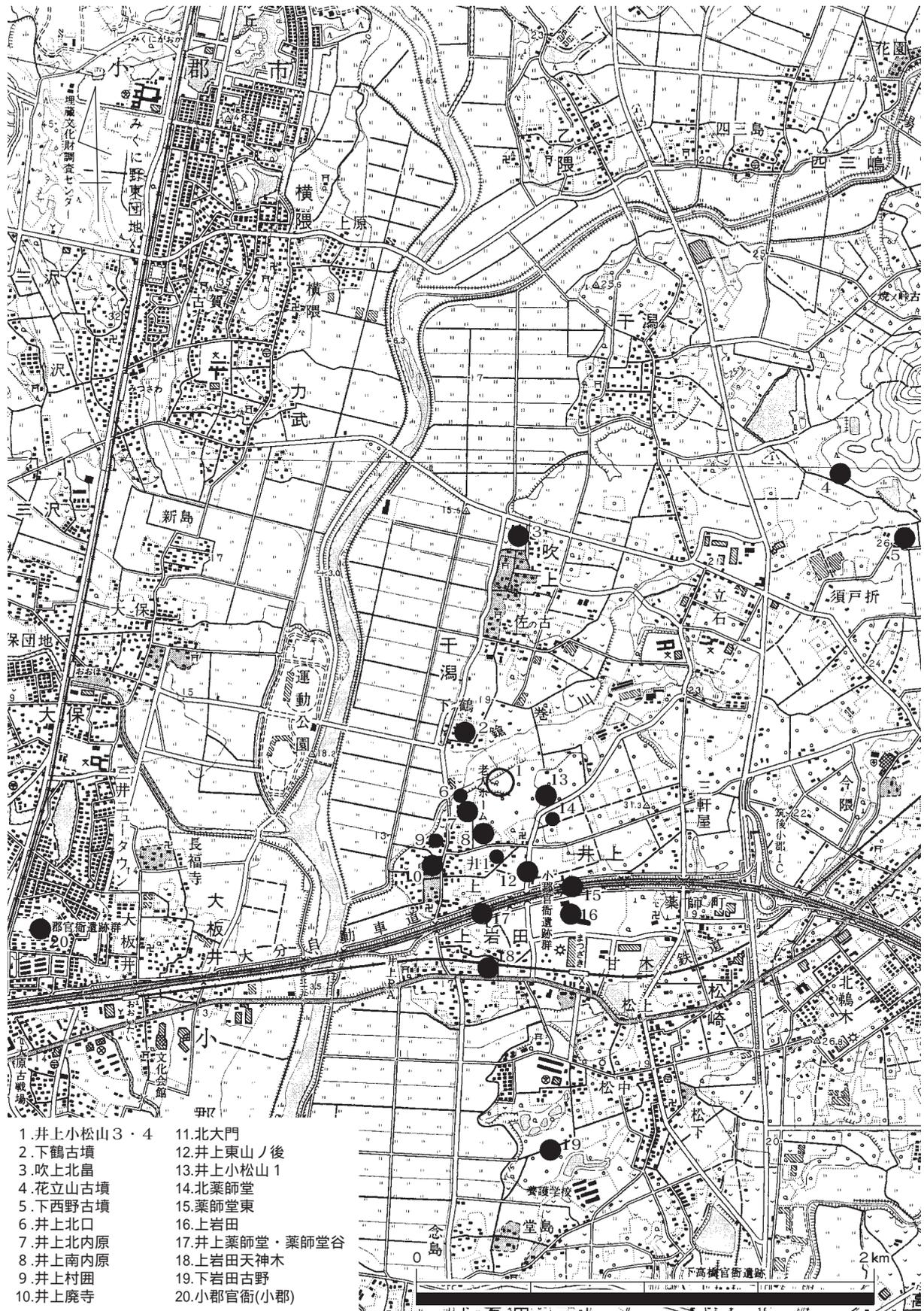
写真1 井上小松山遺跡3 表土掘削状況



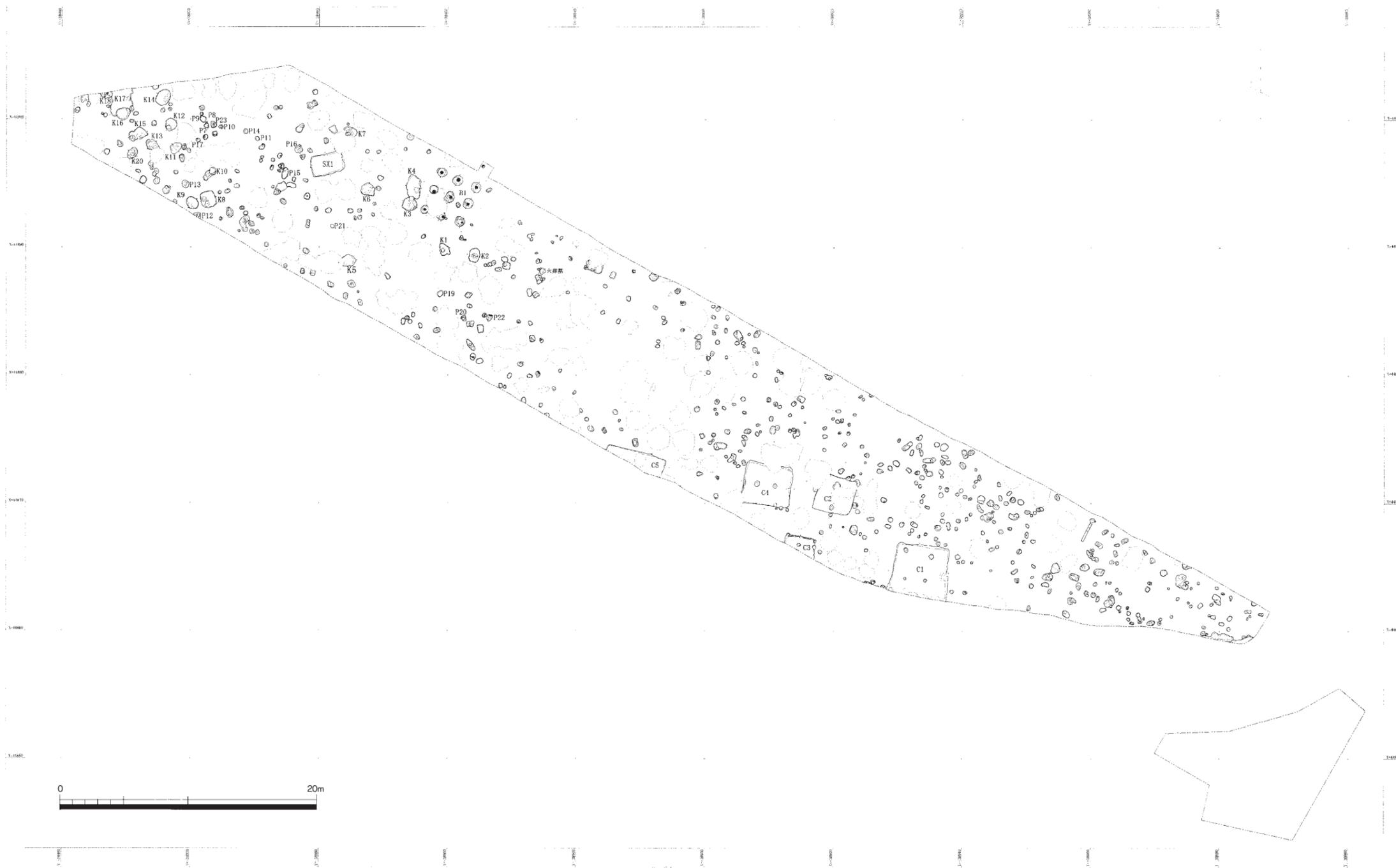
写真2 井上小松山遺跡4 調査状況



写真3 調査区上空から下鶴集落を臨む



第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/25000)



第3図 井上小松山遺跡3 遺構配置図 (S=1/350)

Ⅲ. 井上小松山遺跡3の調査の内容

1. 調査の概要 (第2・3図)

今回の調査は当初2,100㎡に及ぶはずだったが、既述のように南側の谷部が真砂土で造成し埋め立てられていたため、その箇所は除外し、最終的に1,266㎡の調査となった。

調査地はもともと早くから植林が行われていたため、多数の樹木痕が攪乱となっており、多数の遺構が破壊されていた。表層は腐植土により構成され、その下層に黒褐色の造成土が堆積していた。さらに暗褐色土があり、この層から掘り込んでいる植林の痕跡もあったため、暗褐色土までは後世の堆積土として把握できた。この下には地山があり、遺構はこの面に掘り込んでいた。

確認した遺構は、弥生時代の祭祀土坑・土坑・ピット・不明土坑、古墳時代の住居・掘立柱建物、古代の火葬墓などである。遺物は祭祀土坑や住居から多数出土したが、その他の遺構からは火葬墓を除いてほとんど出土していない。

2. 遺構と遺物

(1) 弥生時代の遺構

a. 祭祀土坑

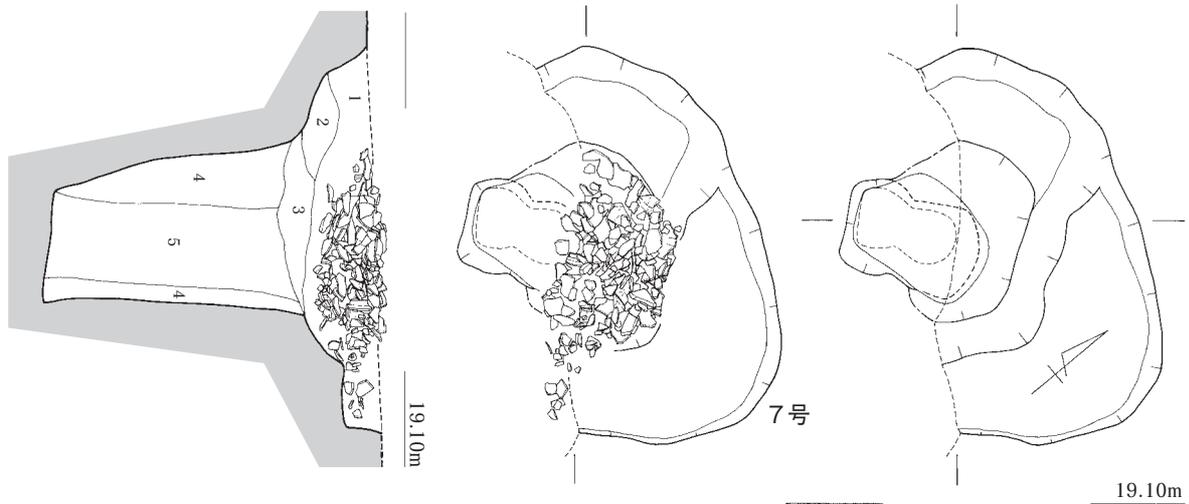
7号土坑 (第4図、図版3) 後世の攪乱を受けているが、遺構の主要部分は概ね残っていた。当初は土坑と判断し掘り下げたが、土器群の取上げ後、下から柱穴が現われた。土層の観察、土器群の出土状況、柱痕内の土器片の存在などを勘案すれば、柱が抜かれた跡に祭祀土坑が形成されたものと推定され、柱痕内の土器片は木柱の抜き取り後の落ち込みの可能性が考えられる。柱の掘方は径41cm程度で、柱痕の径は22cmである。掘方埋土は灰黄褐色土のみで、互層状に埋め戻すなどの工程はみられない。祭祀土坑自体の規模は長軸1.07m、短軸残存長0.59mほどで、楕円形に復元できる。土坑は3段に掘られ、深さは26cmを測る。被熱の痕跡は確認できないが、土器片に混じって炭化物が多く認められた。

土坑と柱穴との直接の関係は定かでないが、柱穴直上に遺物が集中堆積している点や、炭化物を多く含む点などから、柱の抜き取り後の祭祀が行われた可能性も留意しておきたい。

遺物は、弥生土器 (第5図1～7) である。1は甕で、胴部以上と底部付近を図面上で復元した。口径は23.6cmを測る。調整は内外面ともにハケで、口縁部にはヨコナデを施す。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は浅黄橙色である。2は甕口縁部で、口径18.0cmを測る。胎土には2mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は明黄褐色である。3・4は壺の底部である。3は底径8.8cmを測る。底部内面には指頭痕が明瞭に残る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が明黄褐色で、外面がにぶい黄橙色である。4は底径7.1cmを測る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が黄橙色で、外面が橙色である。5は壺口縁部小片で、外面に丹塗りが施されている。調整はヨコナデである。胎土には4mm以下の砂粒を多くに含み、焼成は良好である。色調は内面が灰白色で、外面が明褐色である。6は壺胴部小片で、内外面に丹塗りを施す。胎土には3mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は明赤褐色である。7は高坏の脚部から坏部にかけてである。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は明赤褐色である。出土した土器から、7号土坑は弥生時代中期後葉に形成されたとみられる。

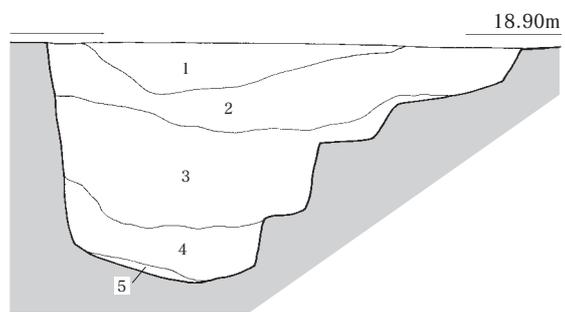
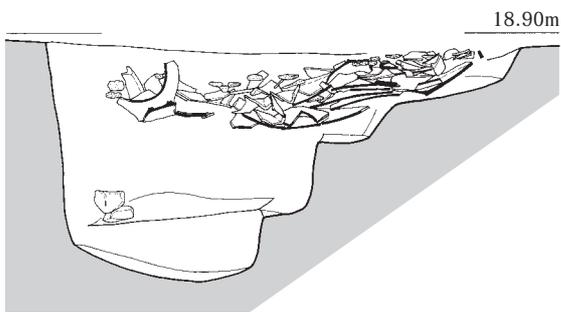
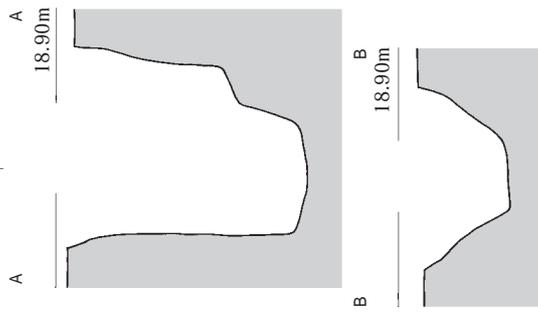
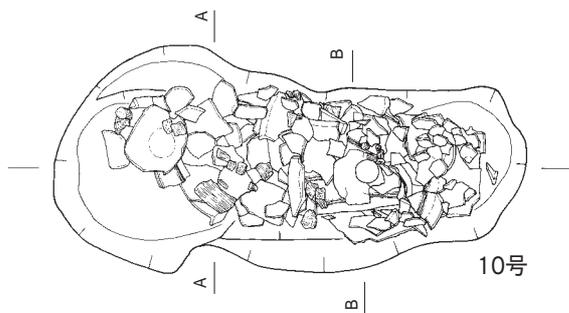
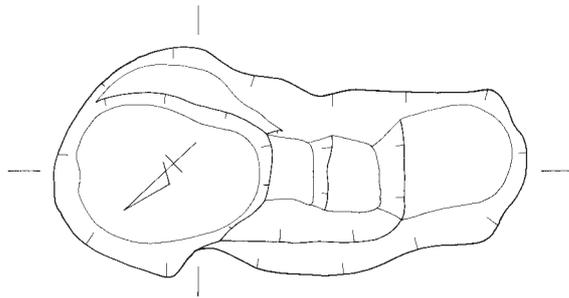
10号土坑（第4図、図版3） 7号土坑とは離れた位置に営まれ、長軸1.24m・短軸0.61mを測る。すでに上部を削平されているが遺存状況は比較的良い。遺構は階段状に4段掘られ、最下段は径0.49m程度の円形を呈する。土器は標高18.65mより上位に堆積し、土器群の20cmほど下に径12cmほどの石材が二つに割れた状態で埋まっていた。埋土中にはK7と同じく炭化物が比較的多く含まれていた。こうした段掘り遺構は柱祭祀との関連も説かれており、注意を要する。

遺物は、弥生土器（第5図8～17・第6図18～31）である。8は甕で、口径28.4cm、底径10.7cm、器高28.4cmを測る。調整は外面がハケで、口縁部がヨコナデ、内面がナデである。胎土には2mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面がにぶい黄橙色で、外面が橙色である。9から14は甕口縁部である。9は口径28.4cmを測り、外面にはハケ目が残る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は内面が黄橙色で、外面がにぶい黄橙色である。10は口径25.4cmを測る。外面の調整はハケで、内面にも横方向から斜め方向のハケ目が残る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は橙色である。11は口径26.4cmを測る。胎土には1mm程度の砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は黄橙色である。12は口径24.4cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は内面が黄橙色で、外面がにぶい黄橙色である。13はやや大型で、口径42.8cmを測る。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は内面が橙色で、外面がにぶい橙色である。14は丹塗り土器である。口縁部には刻み目を施し、口縁部下位に断面M字状の突帯を1条有する。口縁部上面には放射状に暗文を施す。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は内面がにぶい黄橙色で、外面が明赤褐色である。15から17は甕の底部から胴部にかけてである。15は底径6.6cmを測り、直線的に立ち上がる。胎土には2mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面がにぶい黄橙色から黄灰色で、外面が明赤褐色である。16は底径9.8cmを測る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面がにぶい黄橙色から灰黄褐色で、外面が明黄褐色である。17は底径11.2cmを測る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が明黄橙色で、外面がにぶい黄褐色である。18は壺である。口径7.8cm、胴部最大径15.1cmを測り、器高は推定で15.1cmである。頸部以上は直線的に立ち上がり、胴部との境目に断面三角形の突帯を1条有する。外面にはミガキを施す。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が橙色で、外面が明赤褐色である。19から22にかけては壺の頸部から口縁部にかけてである。19は復元口径約28cmを測る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は赤色である。20は小片だが、内外面ともに丹塗りである。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は明赤褐色である。21は口径20.5cmを測り、頸部外面に縦方向の暗文を施す。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が橙色で、外面が明赤褐色である。22はやや大型で、口径18.2cmを測り、現状の器高は12cm程度である。外面及び内面上半に丹塗りを施す。胎土には2mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は明黄褐色から明赤褐色である。23・24は壺の胴部から頸部にかけてである。23は外面調整ハケで、丹塗りを施す。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が明黄褐色で、外面が明赤褐色である。24は球胴状を呈する。内外面ともにハケ目が残る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は内面が浅黄橙色で、外面が橙色である。25から28は壺の底部から胴部にかけてである。25は外面に明瞭なハケ目が残る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は明赤褐色である。26はやや大型で底径7.8cmを測る。外面調整はハケで、丹塗りを施す。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、



- 1 暗灰褐色土 (ややしまりなし、黒褐色土混じり) 炭混
- 2 黄褐色土 (粘質=地山ブロック、よくしまる)
- 3 灰褐色土 (にぶい、しまりあり) やや炭、地山土混
- 4 灰黄褐色土 (地山土に灰褐色土混じる、しまる、炭若干混じる)
- 5 暗褐色土 (炭、土器片数点含む、ややしまりなし) →柱痕

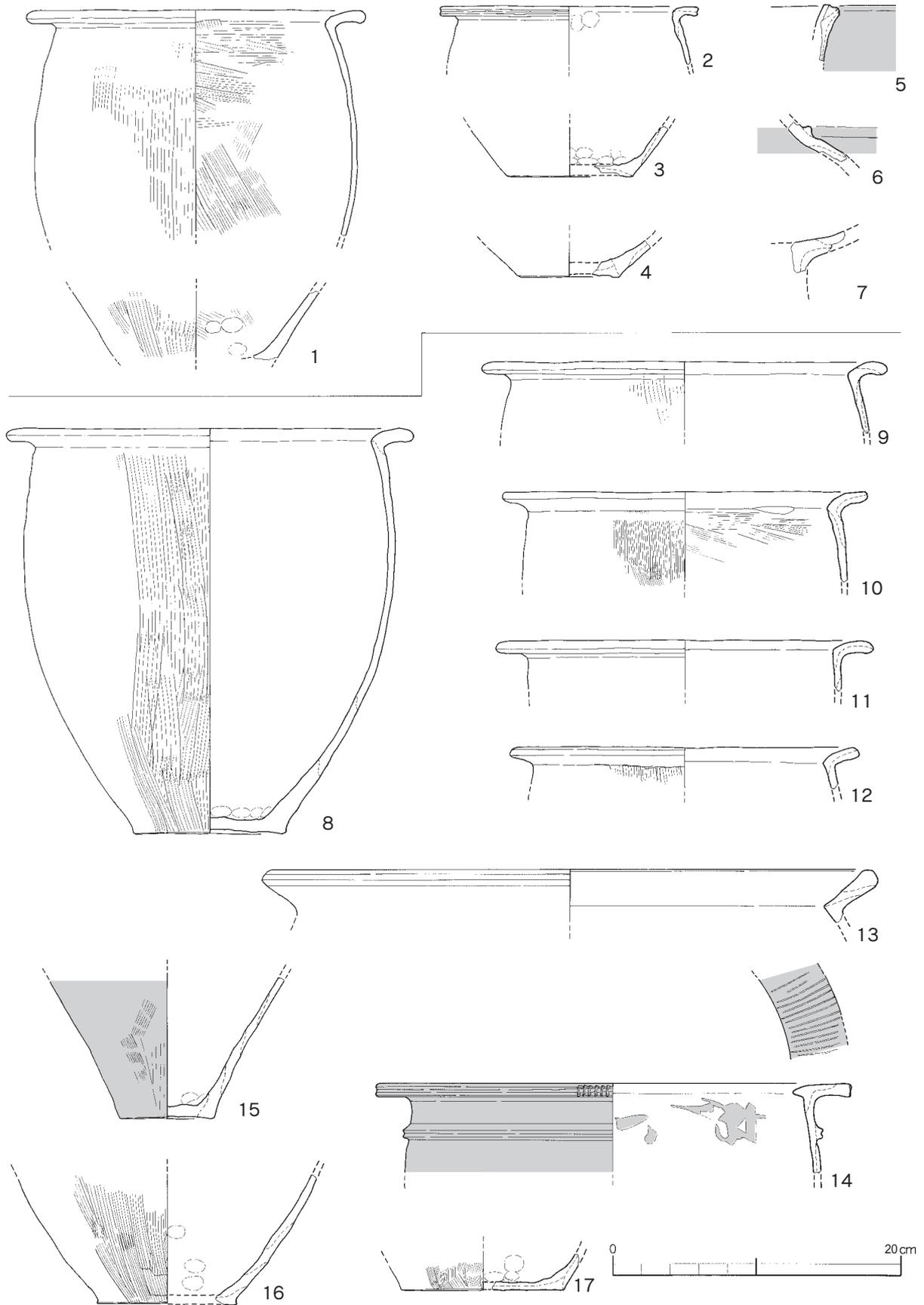
上層の祭祀土坑
柱穴



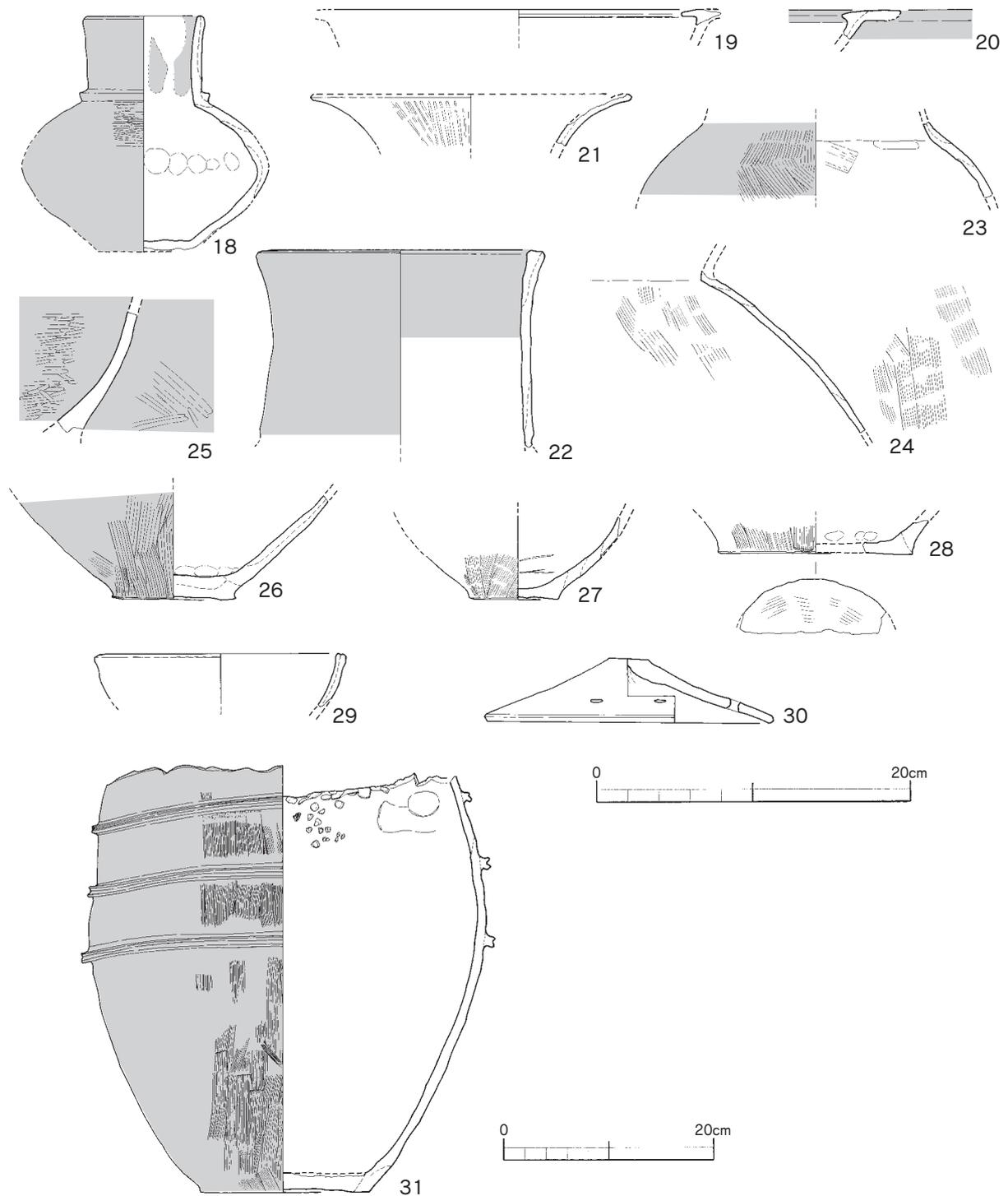
- 1 灰褐色土 (若干地山混じり、炭小片目立つ、ややしまる)
- 2 暗灰褐色土 (ややしまりあり、炭小片と土器多数含む)
- 3 黒褐色土 (ややしまりあり、炭小片含む、遺物は石のみ)
- 4 灰黄褐色土 (しまりよし)
- 5 にぶい黄褐色土 (しまりよし)



第4図 祭祀土坑 (K7・K10) 実測図 (S=1/20)



第5图 祭祀土坑出土遺物実測図 (1) (S=1/4)



第6図 祭祀土坑出土遺物実測図 (2) (S=1/4,1/6)

焼成は良好である。色調は内面がにぶい黄橙色で、外面が赤色である。27は底径5.7cmを測る。外面にはハケ目が残る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が黄橙色で、外面が橙色である。28は底径12.4cmを測る。外面にはハケ目が残る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面がにぶい黄橙色で、外面が浅黄橙色である。29は鉢の口縁部小片である。口径16.0cmを測り、調整は内外面ともにヨコナデである。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が橙色で、外面がにぶい黄橙色である。30はほぼ完形の蓋である。天井部径2.5cm、裾部径18.6cm、器高4.1cmを測る。2ヶ所セットの穿孔を両側に計4ヶ所施す。胎土には2mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は橙色である。

31は大型の甕である。口縁部は打ち欠いている。底径16.4cm、胴部最大径33.8cm、現状の器高41.7cmを測る。外面には縦方向のハケ目が残りに、丹塗りを施していたものと考えられる。胴部中位から上方に断面M字状の突帯を3条有する。胎土には3mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は橙色からにぶい黄橙色である。出土した土器から、弥生時代中期後葉に営まれた遺構と推定される。

b. 土坑

1号土坑 (第7図) 1.08m×0.71mの不整楕円形を呈し、中央西寄りがピット状に一段深くなり、その深さは0.21mである。遺物は、甕口縁部小片が出土したが、図示していない。

2号土坑 (第7図) 1.1m×0.84mの楕円形を呈し、中央部が1段深くなる2段掘りで、深さは0.28mである。1段目は深さ0.03~0.04mと極めて浅い。出土遺物はない。

3号土坑 (第7図、図版4) 1.2m×1.1mの不整形な円形を呈し、深さは0.05~0.12mである。出土遺物はない。

4号土坑 (第7図、図版4) 3号土坑に切られ、長さ1.93m×幅1.1mの不整形な長楕円形を呈する。深さは0.04~0.1mと極めて浅い。出土遺物はない。

5号土坑 (第7図、図版4) 攪乱による破壊を受けているが、残存長1.08m×幅0.94mの不整形な楕円形を呈する。深さは0.1mである。出土遺物はない。

6号土坑 (第7図、図版3) 1.08m×0.98mの不整形な楕円形を呈し、深さは0.26mである。遺物は、石器が1点出土した(第9図1)。石器は性格が不明だが、径2.7cm、厚さ1.8cmを測る。石材は安山岩である。

8号土坑 (第7図、図版4) 1.18m×1.28mの隅丸長方形を呈し、深さは0.29mである。南側に寄って浅いくぼみが認められるが、概ね平坦な底面をなし、他の土坑と比較して整った形態をしている。遺物は、弥生土器甕小片が1点出土した(第9図2)。外面にはハケ目が残る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が浅黄橙色で、外面が明黄褐色である。

9号土坑 (第7図、図版4・5) 1.06m×0.96mの楕円形を呈し、深さは0.06~0.1mである。出土遺物はない。

11号土坑 (第7図、図版5) 1.02m×0.72mの不整形な楕円形を呈し、北側が1段深くなり、その深さは0.3mである。出土遺物はない。

12号土坑 (第7図、図版5) 南側をピットに切られている。径0.46mの不整形な円形を呈し、深さは0.07mである。出土遺物はない。

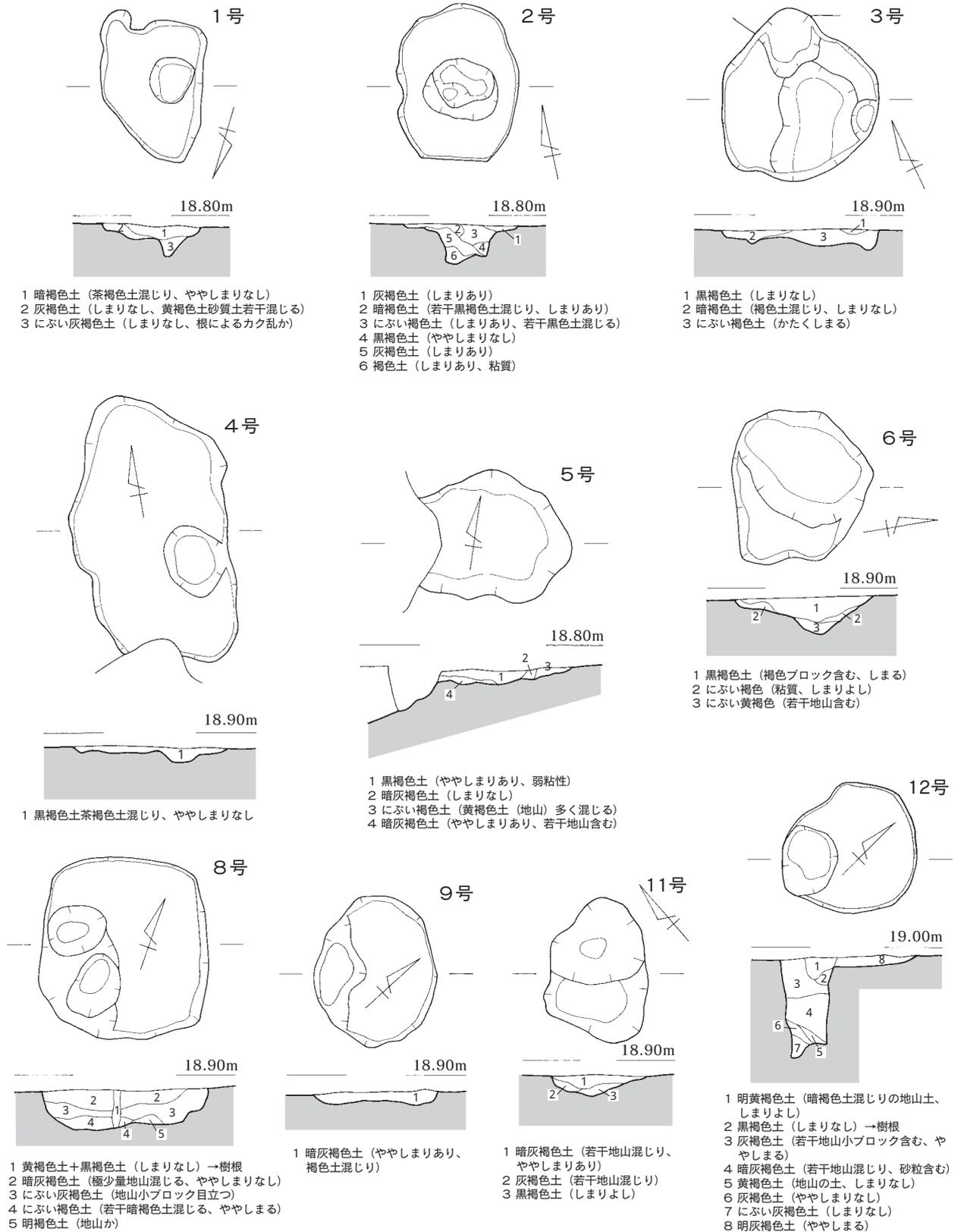
13号土坑 (第8図、図版5) 攪乱により一部破壊を受けているが、長さ1.15m以上×幅0.8mの楕円形を呈し、深さは0.18mである。出土遺物はない。

14号土坑 (第8図、図版5) 1.32m×1.01mの楕円形を呈し、深さは0.1mである。全体にほぼ同じ深さで、東側が一部深くなる。出土遺物はない。

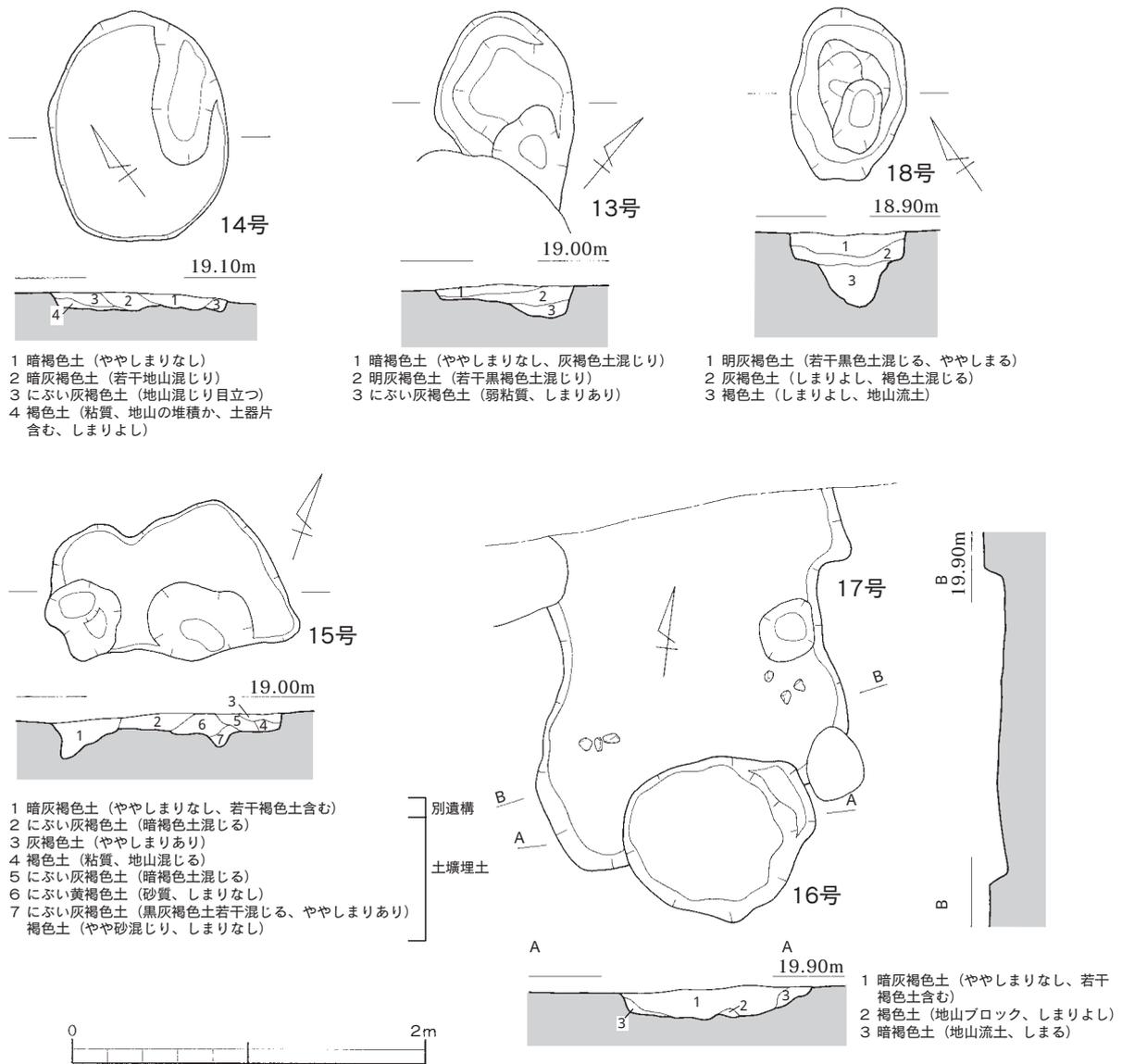
15号土坑 (第8図) 1.45×0.92mの不整形な平行四辺形状を呈し、深さは0.1mである。南西側はピットにより切られている。出土遺物はない。

16号土坑 (第8図) 1.09×0.94mの不整楕円形を呈し、深さは0.17mを測る。出土遺物はない。

17号土坑 (第8図) 東西1.73m、南北1.94m以上を測り、深さ0.1m前後の浅い遺構である。数ヶ所に石材がまとまっていた。遺物は、縄文土器片5点と、石器が出土した(第9図3・4)。縄文土器は鉢の胴部片と考えられる。胎土は粗く、5mm以下の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調はにぶい



第7図 1~6・8・9・11・12号土坑実測図 (S=1/40)



第8図 13~17号土坑実測図 (S=1/40)

黄橙色である。石器は磨石である。現状で長さ9.3cm、幅8.7cm、厚さ5.5cmを測る。表面には一部敲打の痕跡が見られる。石材は安山岩である。

18号土坑 (第8図) 0.98×0.66mの不整楕円形を呈し、二段掘りで深さ0.42mを測る。出土遺物はない。

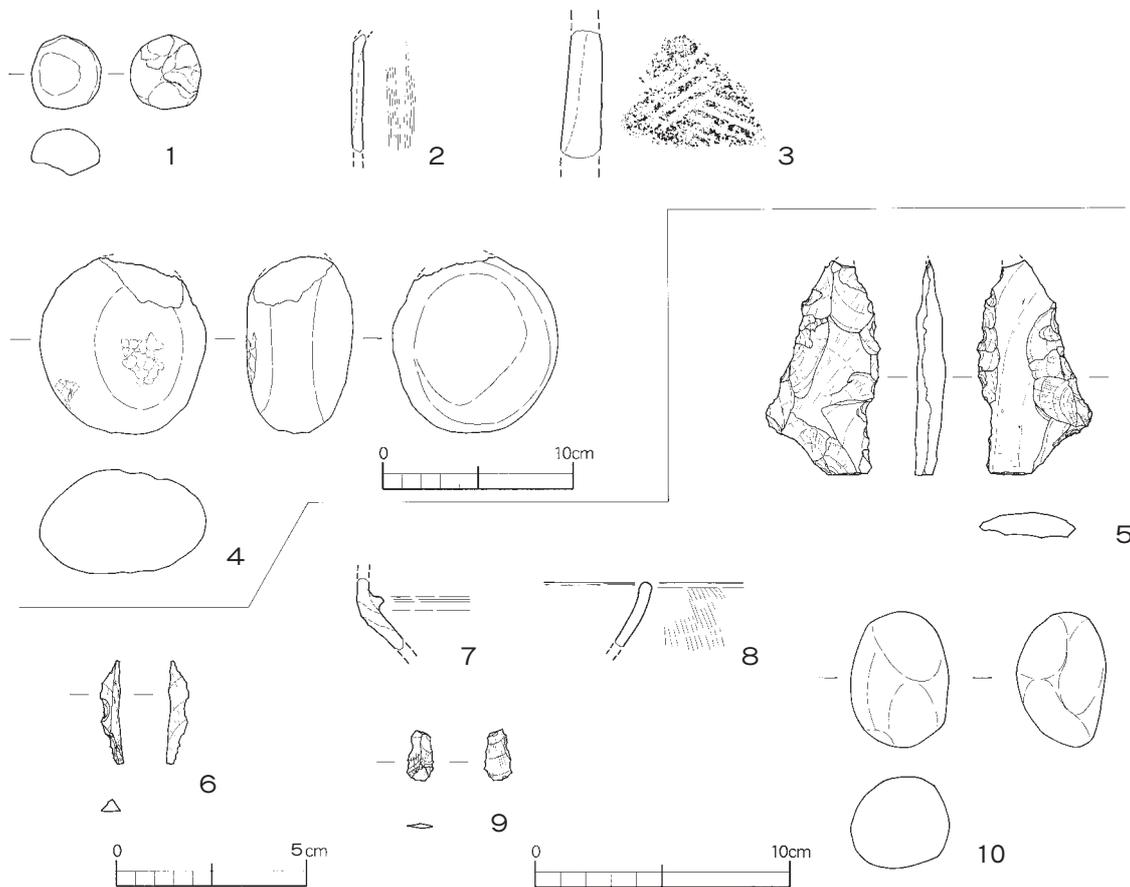
c. ピット

ピットと判断した遺構は多数ある。中には掘立柱建物などに伴う柱穴も含まれるかもしれないが、現段階では建物の復元には至らなかった。ここでは出土遺物についてのみ概述しておく。

P11出土遺物 (第9図5) 5は安山岩製のスクレイパーである。長さ8.4cm、幅3.9cm、厚さ1.05cmを測る。

P14出土遺物 (第9図6) 6は黒曜石の剥片である。長さ2.75cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。

P16出土遺物 (第9図7~9) 7は弥生土器壺の頸部小片である。胴部と頸部の境目に、断面台形



第9図 土坑・ピット出土遺物実測図（6・9はS=1/2,4は1/3,その他は1/4）

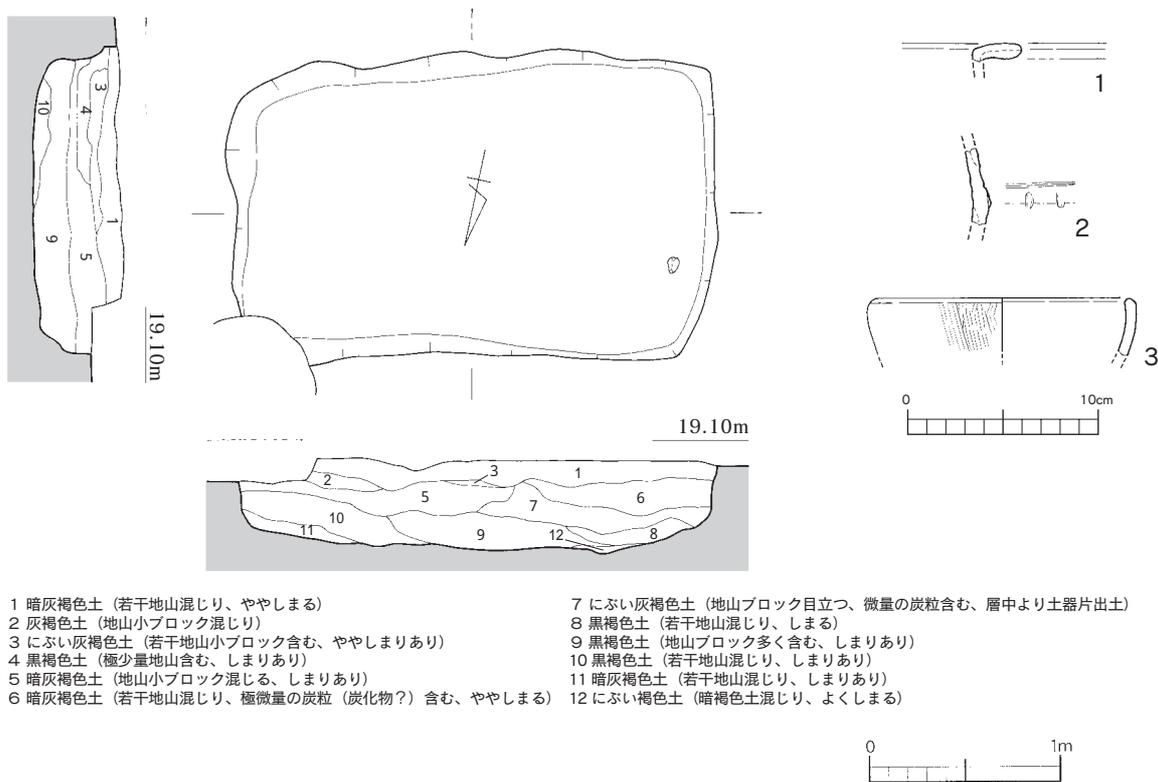
状に近い突帯を1条有する。胎土には4mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は内面が黄橙色で、外面が橙色である。8は弥生土器鉢の口縁部小片である。外面にはハケ目が残る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は橙色である。9は黒曜石の剥片である。長さ1.7cm、幅1.1cm、厚さ0.45cmを測る。

P21出土遺物（第9図10） 10は安山岩製の投弾である。長さ5.4cm、幅3.8cm、厚さ3.6cmを測る。

d. 不明遺構 (X1) (第10図、図版6)

この遺構は規模・形態とも整っており、他の土坑とは性格が異なると考えられることから、区別する意味で「不明遺構」とした。規模は長軸2.52m×短軸1.59m×深さ0.47mで、平面形は隅丸長方形を呈する。土壙墓や木棺墓である可能性も考慮して掘り下げたが、土層による観察によってもそれらしき痕跡はなかった。

遺物は、土器片と石材が1点出土したが、いずれも破片資料で埋没ないし埋め戻しの時点で混入した遺物と推定される（第10図1～3）。1は弥生土器甕の口縁部小片である。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調はにぶい橙色である。2は弥生土器甕の胴部小片である。屈曲部に大きめの刻み目を施す。胎土はやや粗く、3mm以下の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は内面がにぶい褐色、外面が橙色である。3は弥生土器鉢の口縁部小片である。外面にはハケ目が残る。胎土には1mm程度の砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は橙色である。破片資料であるため時期は明確でないが、弥生時代中期に位置付けられよう。



第10図 不明遺構及び出土遺物実測図 (S=1/40,1/4)

(2) 古墳時代の遺構

a. 竪穴住居

1号竪穴住居 (第11図、図版2・6)

住居群の中で最も東に位置する。一部調査区外に及ぶが、東西は北辺で4.08m、調査壁側で4.66mを測り、南北は東辺が現状で4.13mを測る。したがって、平面形は南側が少し広がる台形状を呈する。主柱穴は床面では確認できず、下層において2本確認したが、恐らく4本柱であったものと推定される。北東側に柱穴らしきピットが存在するが、やや不整形で底面も全体に傾斜しており、柱穴とするのに躊躇する。床面は黄褐色の地山土を多く含む暗褐色土 (第17層) が敷かれていたが、全体的に水平な面をなさない。また、住居の南側調査区外は谷地形となっているため、調査区沿いの床をみると早い時点での崩落の痕跡が認められる。東側の壁際には屋内土坑が1基営まれており、埋土中や周辺から多数の土師器が出土した。なお、床面直上の層からは古代の土師器片が出土しており、上層は後世の混じり込みがある。

ところで、1号竪穴住居の検出時に東辺沿いの一部に焼土の広がりが見られカマドの存在が推定されたことから、数ヶ所にサブトレンチを設けて土層観察を行ったが、結果的にはカマドを示す構造物はなく、焼土は土坑状を呈することが判明した。したがって、この焼土層は後世の土坑に伴うものと推定される。

1号竪穴住居から出土した遺物 (第12図) は、土師器 (1~12)、鉄刀子 (24)、磨石 (23) である。このうちには先述したように古代の土師器も混入している (13~21)。1から3は土坑埋土中から出土した土器である。1は小型の壺である。口径9.2cm、器高6.3cmを測る。調整は内外面ともにナデで、内面には指頭痕が多く残る。2は高坏で、口径16.2cm、底径12.5cm、器高14.0cmを測る。

調整は、坏部が内外面ともハケ後ナデで、脚部外面はタテハケ後ナデである。脚部内面にはシボリ痕が残る。3は甕である。口径15.0cm、胴部最大径22.6cm、器高24.6cmを測る。調整は胴部外面がタテハケで、口縁部がヨコハケ後ナデ、胴部内面がヘラケズリである。外面上半及び内面下半にススが付着している。4・5は小型の壺である。4は口径7.2cm、胴部径6.5cm、器高7.5cmを測る。内外面ともに粗いミガキを施す。5は口径9.2cm、胴部径8.0cm、器高7.2cmを測る。内外面ともにハケの後ナデを施す。6は小型壺の口縁部小片である。外面にタテハケを施す。7は小型壺の胴部から口縁部にかけてである。口径9.3cmを測る。調整は胴部外面がタテハケ後ヨコハケで、口縁部にはヨコナデを施す。胴部内面には指頭痕が明瞭に残る。8は小型壺の胴部である。外面にハケ目が残る。9は高坏である。口径17.0cm、底径13.2cm、器高13.7cmを測る。調整は坏部は丁寧にヨコナデを施しており、脚部外面はタテハケ後ナデである。脚部内面にはシボリ痕が残る。10は土錘片である。現状で長さ2.9cmを測る。11・12は甕の胴部小片である。ともに調整は外面がハケで、内面がケズリである。

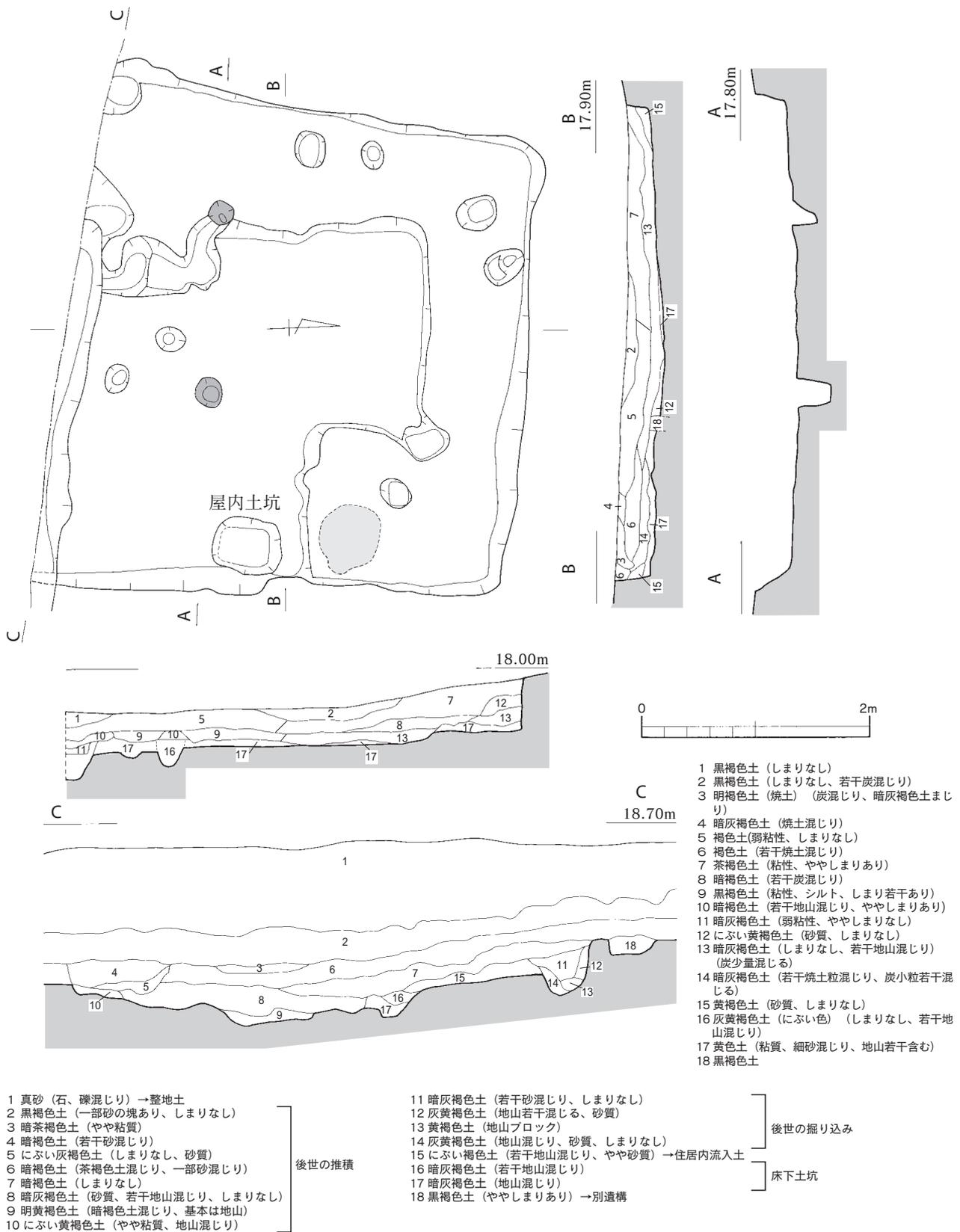
13は坏である。口径12.7cm、底径7.9cm、器高3.4cmを測る。調整は、内面から外面にかけて回転ナデで、底部はヘラケズリである。14・15は坏小片である。調整はいずれも内面から外面がナデで、底部がヘラケズリである。16・17は坏口縁部小片である。調整はいずれも回転ナデである。18から20は甕の口縁部である。18は外面に一部ハケ目が、内面に一部ケズリの痕跡が残る。19は口径14.2cmを測る。調整は外面がハケで、内面がヘラケズリである。20は口径16.3cmを測る。調整は19と同様である。21は甕の底部から胴部にかけてである。調整は外面がハケで、内面がヘラケズリである。22は青磁碗の小片である。23は磨石と考えられる。径4.9cm、厚さ1.8cmを測る。石材は安山岩である。24は鉄刀子である。切先を欠損するが、現状で長さ5.8cm、刃部長3.0cm、刃部幅1.25cmを測る。

屋内土坑出土の土器から、古墳時代前期に位置付けられよう。

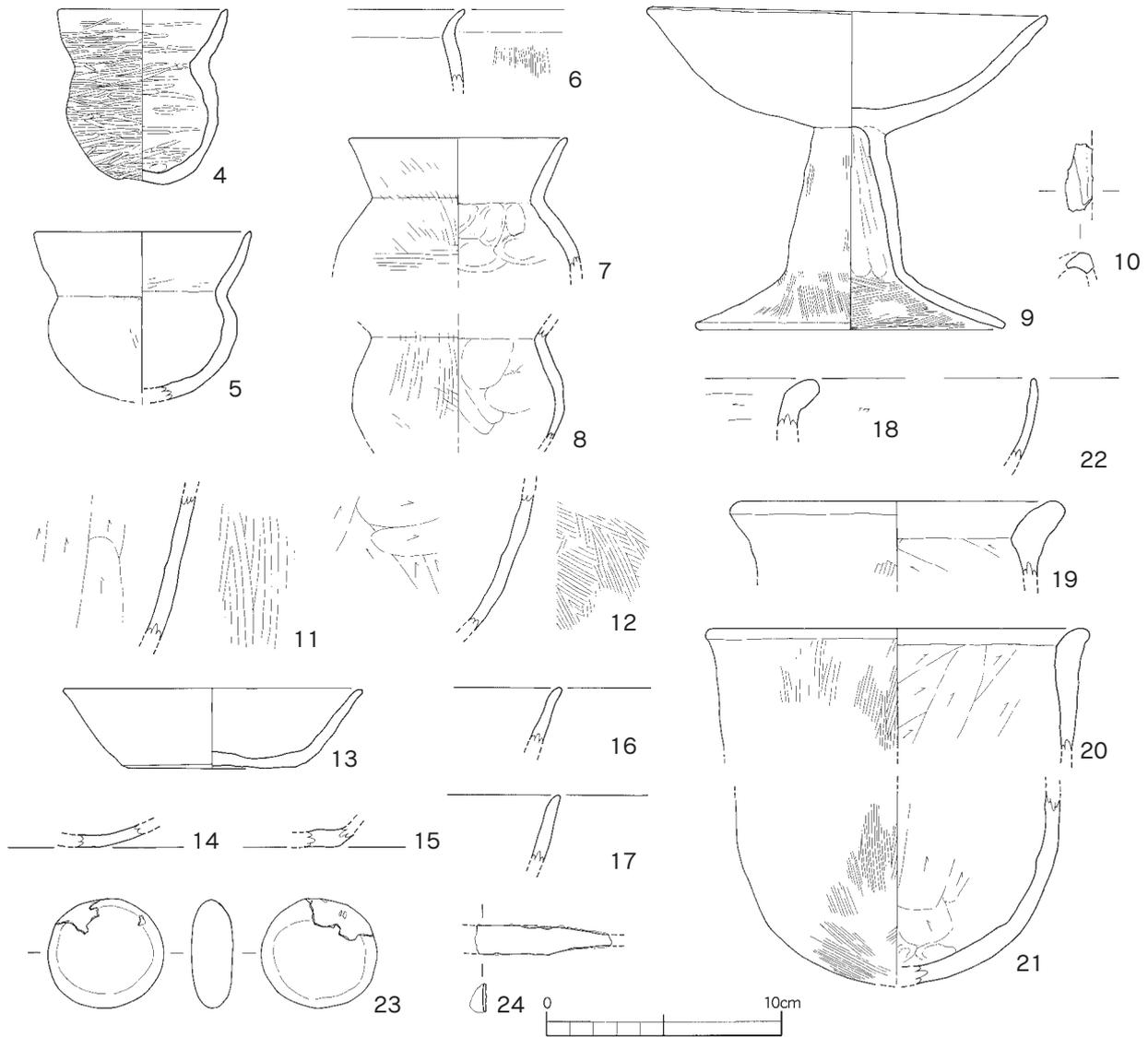
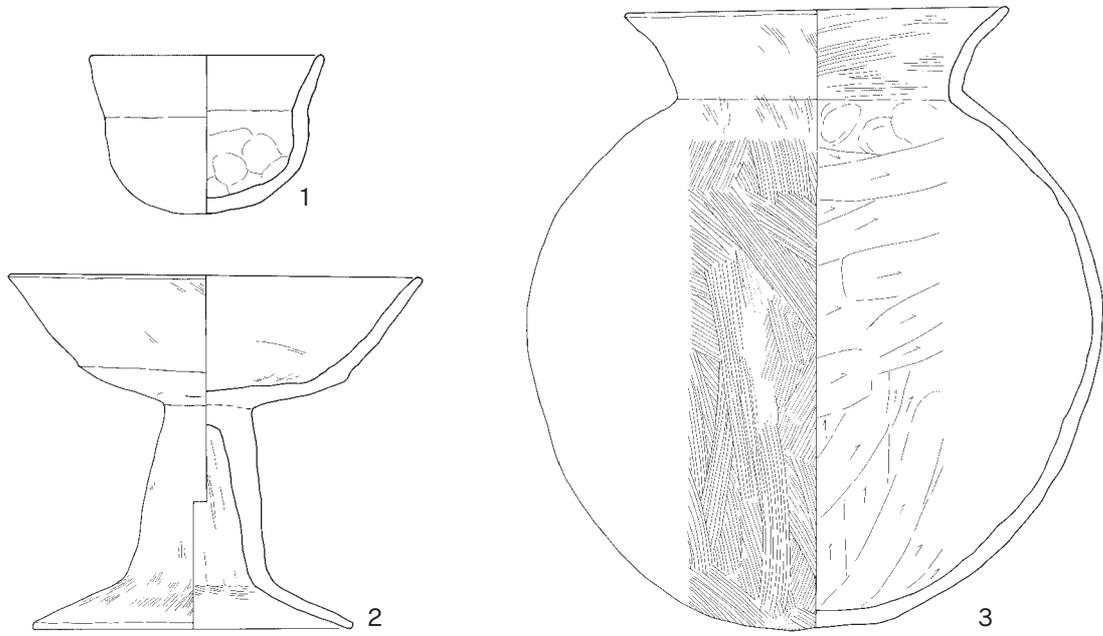
2号竪穴住居（第13図、図版6）

1号竪穴住居の西側に位置し、平面が東西2.95m、南北2.85mの略方形を呈する、小型の住居である。後世の植林によって大きく破壊を受けている。もともと緩やかな傾斜地に含まれていることから、南側はほとんど床面しか残っていない。支柱穴は2本で、ちょうど土層ベルト直下にあったため、ベルト掘削時に確認した。北側の柱穴は攪乱により破壊を受けているが、南側の柱穴の残りは良かった。床面は灰褐色土で平坦にしていた。南西部をはじめ南側を中心に炭化物の分布がみられ、その付近から土師器甕が割れた状態でまとまって出土している。おそらく中央に炉が存在するものと考えられるが、攪乱を受け不明である。南東部床下には土坑状の掘り込みがみられたが、その性格は不明である。

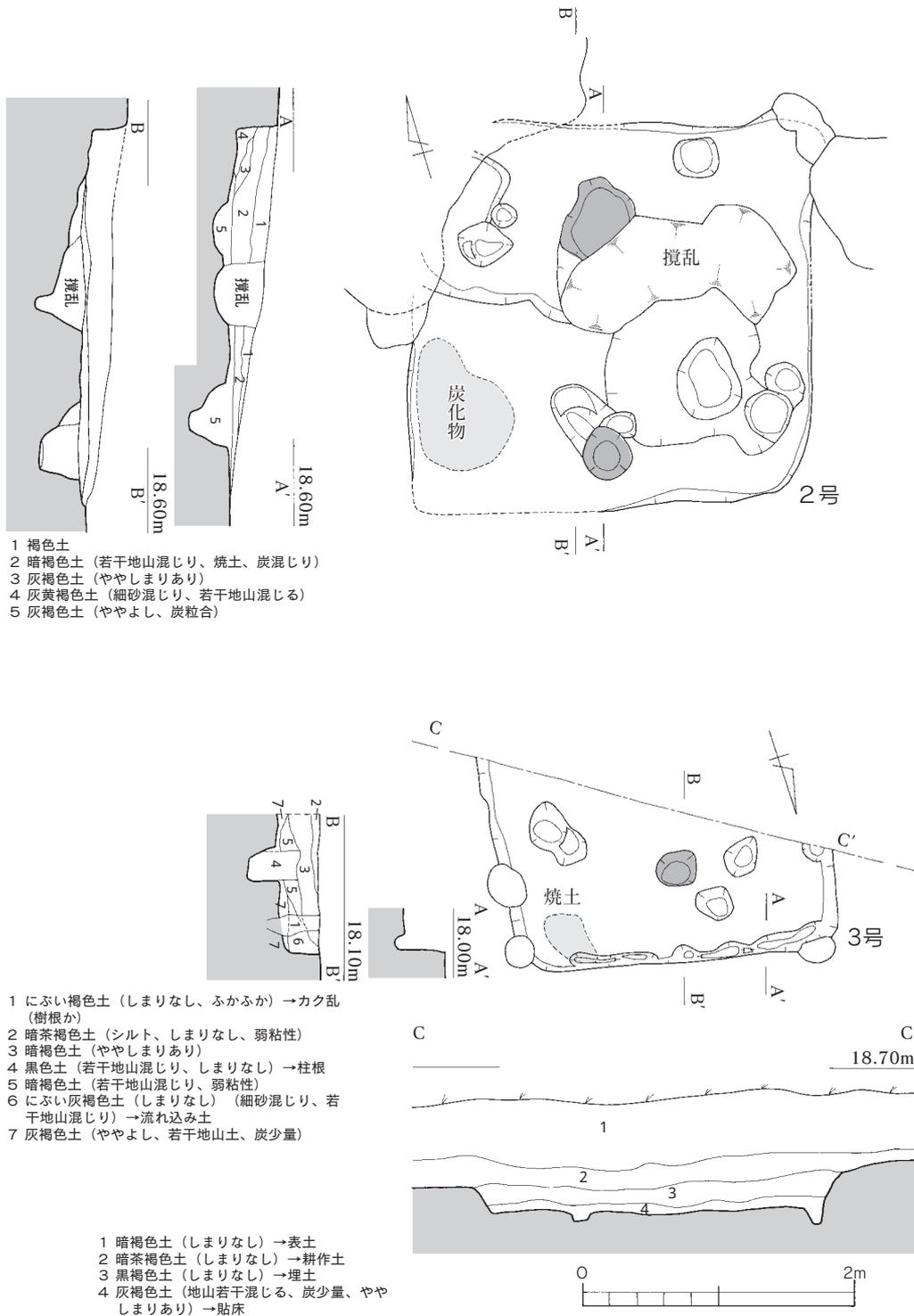
出土遺物（第15図）は、土師器（2～5）、砥石（1）である。1は砥石で4面使用されている。残存長10.1cmを測り、幅は2.5～5.7cmである。2は小型の壺である。口縁部を欠損するが、胴部径6.9cm、底径3.7cmを測る。調整は外面がナデで、胴部内面には横方向のハケ目が残る。3から5は甕である。3は口径15.0cm、胴部最大径20.0cm、器高22.2cmを測る。調整は胴部外面上位がタテハケ後ヨコハケ、下位がタテハケ後斜め方向のハケ、口縁部がヨコナデ、胴部内面がヘラケズリである。外面胴部中位にススが付着している。4は口径17.1cm、胴部最大径28.2cmを測るやや大型の甕である。調整は3と同様である。外面胴部にススが付着している。5は口径17.8cm、胴部最大径24.9cm、器高27.1cmを測る。調整は3・4と同様である。3の甕は比較的元の形態をとどめていたが、その他の甕は破碎されたかのような状態で出土した。これらの遺物から、2号竪穴住居は古墳時



第11図 1号竪穴住居実測図 (S=1/50)



第12图 1号竖穴住居出土遺物実測図 (S=1/3)



第13図 2・3号竪穴住居実測図 (S=1/50)

代前期に営まれたものと推定される。

3号竪穴住居 (第13図、図版7)

2号竪穴住居の南にあり、正確な規模は不明だが、東西は北辺で2.40m、南北は東辺で1.65mを測る。2号竪穴住居と同じく小型の住居といえる。床面は灰褐色土により平坦にする。主柱穴は2本柱で、北側の1本のみを検出している。北東隅付近では床面上に焼土がみられたが、面的に広がるのみであった。なお、床下の掘り込みは認められないが、北壁沿いに一部溝状の浅いくぼみがある。

遺物は、埋土中やピットから土師器小片 (第15図6~9) が出土した。6は高坏の脚部小片である。

7は壺の頸部で、外面調整はヨコナデである。8・9は甕の胴部小片である。調整はいずれも外面がハケで、内面がヘラケズリである。これらは小片のみで、時期判定を行うことは困難である。

4号竪穴住居（第16図、図版7）

2号竪穴住居の西隣に位置し、2ヶ所ほど攪乱を受けているが、比較的遺存状況は良い。ただ、2号竪穴住居と同様に傾斜地に位置するため、南側は上部を大きく削られている。東西3.71m、南北3.18mを測り、東西に長い隅丸長方形を呈する。主柱穴は東西に配された2本柱で、とくに西側の柱穴の遺存状態は極めて良く、柱痕を確認することができた。主柱穴に挟まれた中央部には浅い窪み状の炉跡があり、焼土がたまり、底面が被熱により赤変していた。床面は暗灰褐色土を薄く敷き、おおよそ平坦に仕上げている。北側の壁際に屋内土坑が1基あるが、埋土中からの遺物はなかった。床下は四隅に土抗状の掘り込みが認められる。

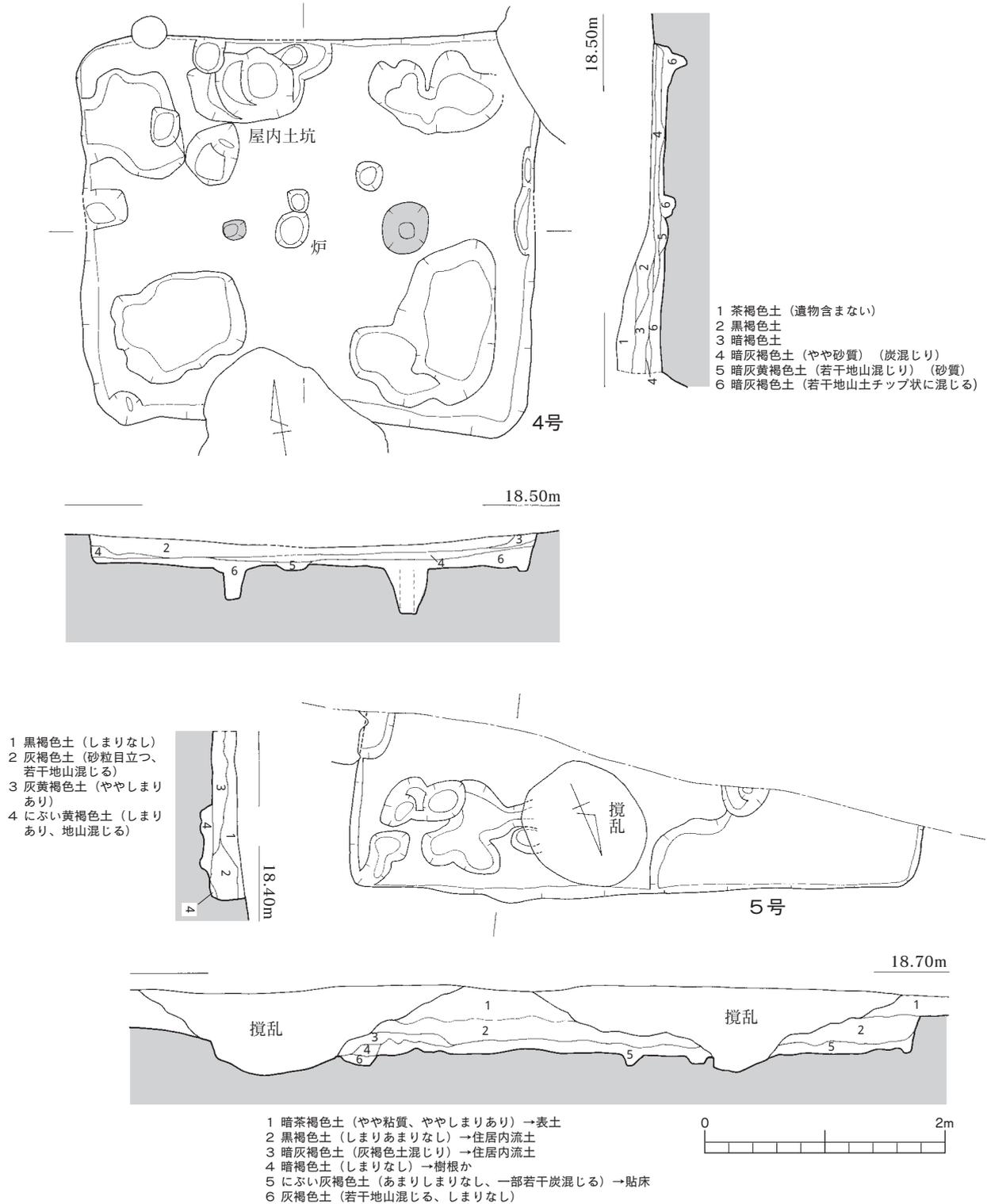
遺物は、土師器（第15図10～14、第16図1～8）、砥石（第16図9）である。炉付近からまとめて出土する傾向があるものの、一部は東西の壁際付近に散在していた。第15図10は袋状口縁壺の口縁部小片である。口径6.7cmを測る。11は壺の底部小片である。12は壺の口縁部である。口径15.2cmを測る。13は甕の胴部から口縁部にかけてで、口径15.5cm、胴部最大径21.7cmを測る。調整は胴部外面タテハケ、口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリである。14は白磁碗小片である。第16図1は坏で、口径10.0cm、器高4.5cmを測る。調整は内外面ともにハケである。2は小型壺で、口径12.2cm、胴部径10.4cm、器高7.1cmを測る。調整は外面ハケ、口縁部ハケ後ナデ、胴部内面ヨコハケ後ヘラケズリである。3は脚付鉢の脚部で、底径7.2cmを測る。調整は脚部外面ナデで、坏部内面ヘラケズリである。4は高坏の脚部で、底径9.8cmを測る。調整は脚部外面縦方向のミガキで、内面ヘラケズリである。5は壺で、口径11.6cm、胴部径13.3cm、器高13.7cmを測る。調整は胴部外面ハケ、口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリである。6から8は高坏である。6は口径15.6cm、底径12.8cm、器高11.0cmを測る。調整は、坏部ハケ後ヨコナデ、外面下半ケズリ後ナデ、脚部外面上半ヨコナデ後ヘラケズリ、下半タテハケ後ヨコナデ、脚部内面下半ヨコハケである。7は口径13.7cm、底径9.8cm、器高12.0cmを測る。調整は、坏部内面ナデ、坏部及び脚部外面タテハケ、脚部内面下半ヨコハケである。8は口径14.4cm、底径10.6cm、器高11.3cmを測る。調整は、坏部内面ヨコハケ後ナデ、坏部外面タテハケ、脚部外面ナデ後タテハケ、脚部内面下半ヨコハケである。9は砥石で、4面使用している。長さ10.7cm、幅3.6～4.3cm、厚さ1.1～2.1cmを測る。1ヶ所に直径3mmの穿孔を施す。出土した遺物から、4号竪穴住居は古墳時代前期に営まれたものと推測される。

5号竪穴住居（第14図、図版7）

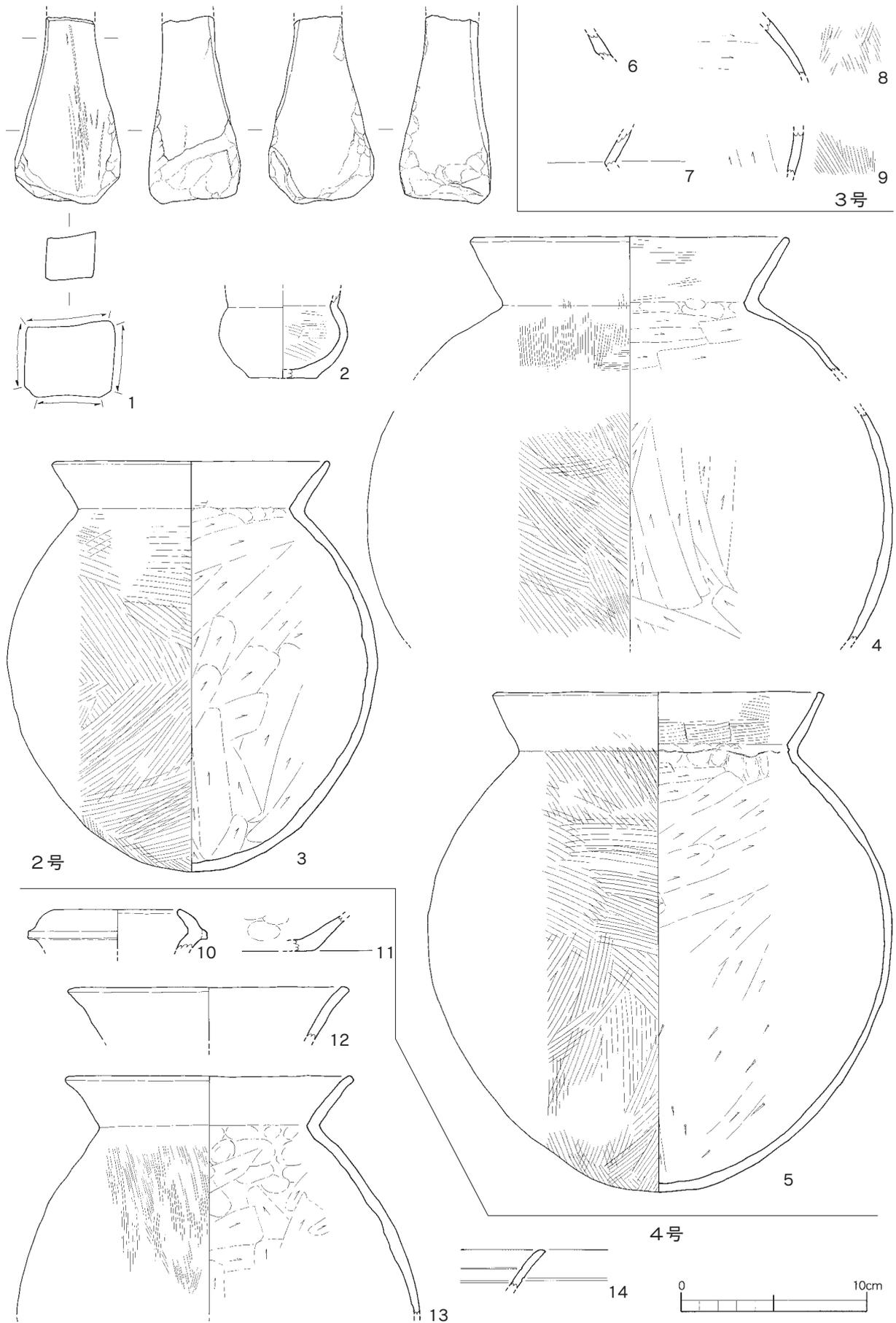
住居跡の中では最も西側に位置し、大半は調査区外に広がっている。東西は4.63m、南北は東辺で現存長1.45mを測る。平面形は不明だが、1号竪穴住居に匹敵する規模である。中央部をはじめ植樹による攪乱を受けている。床面はにぶい灰褐色土で整えられ、遺物の多くはこの面に接して出土した。主柱穴は確認することができなかった。

出土遺物は、土師器（第16図10～17）で、遺存状態は良く、多くは北壁沿いにまとめて出土している。10は小型壺の口縁部で、口径8.2cmを測る。11は鉢の底部である。調整は外面タテハケ、内面ナデである。12は小型壺で、口径12.3cm、器高10.6cmを測る。調整は外面から口縁部内面がハケで、胴部内面ヘラケズリである。13は鉢である。口径15.2cm、器高7.0cmを測る。調整は外面ヨコ

ハケで、内面ナデである。14・15は高坏の坏部小片である。16は甕の口縁部小片である。17は甕で、口径14.9cm、胴部最大径11.8cm、器高20.9cmを測る。胴部は球胴形を呈する。調整は胴部外面ハケ、口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリである。これらの遺物から、5号竪穴住居は古墳時代前期に営まれたものと推定される。

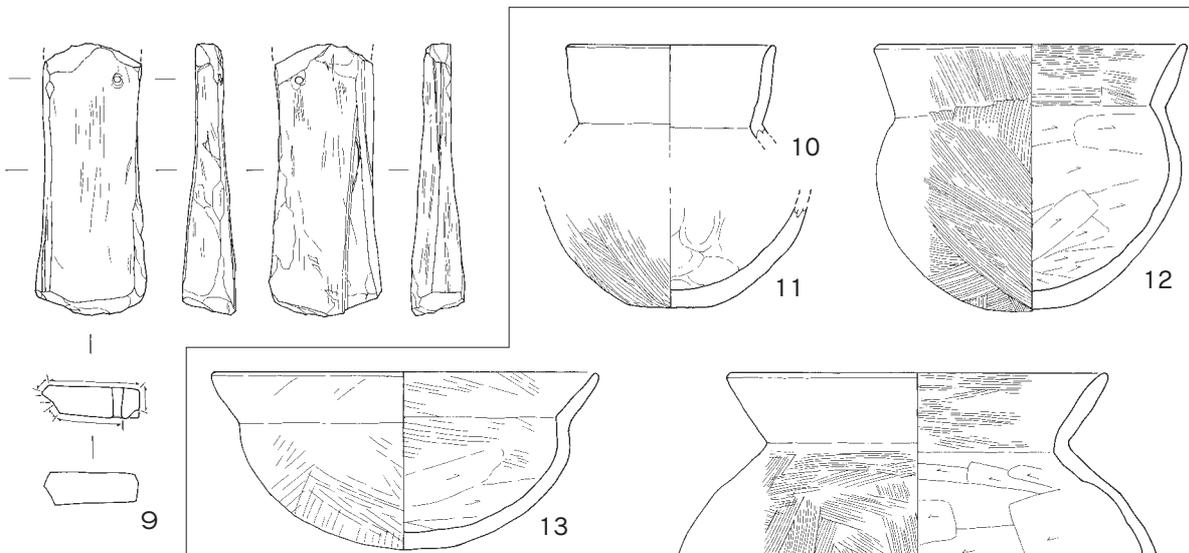
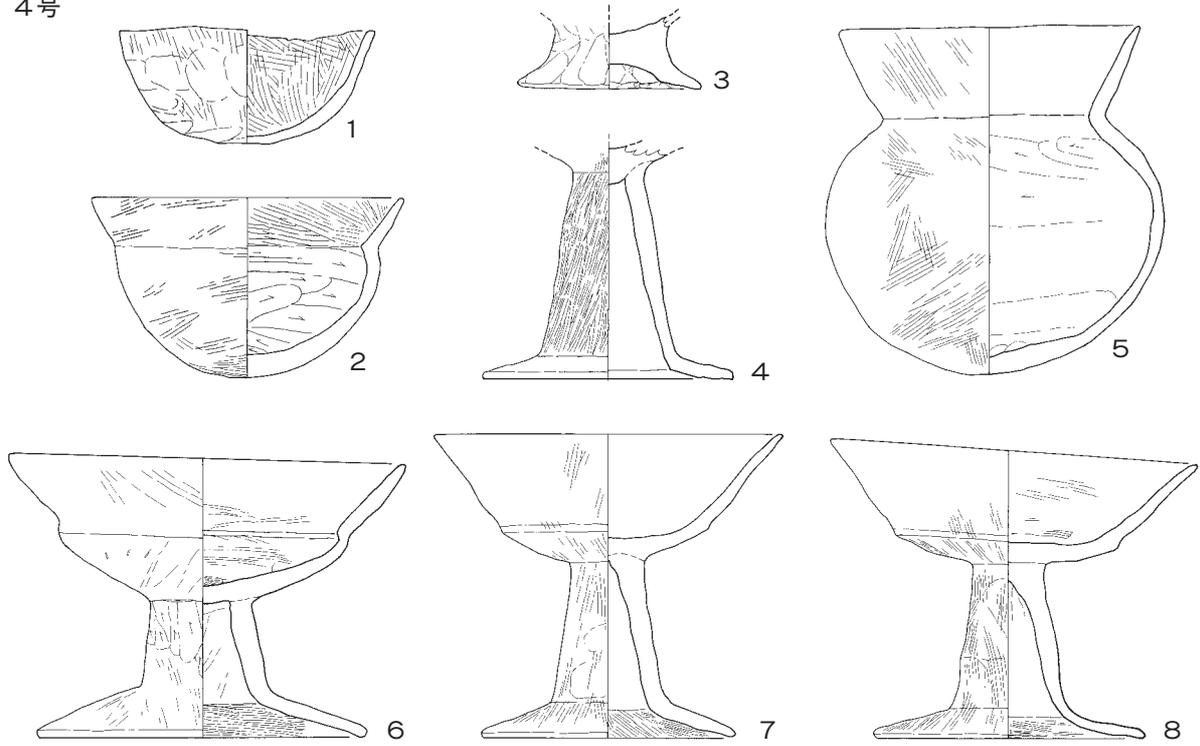


第14図 4・5号竪穴住居実測図 (S=1/50)

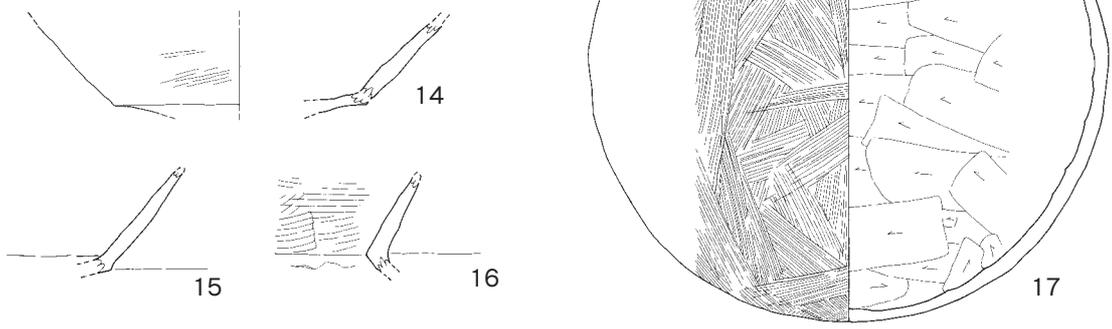


第15图 2~4号竖穴住居出土遺物実測図 (S=1/3)

4号



5号



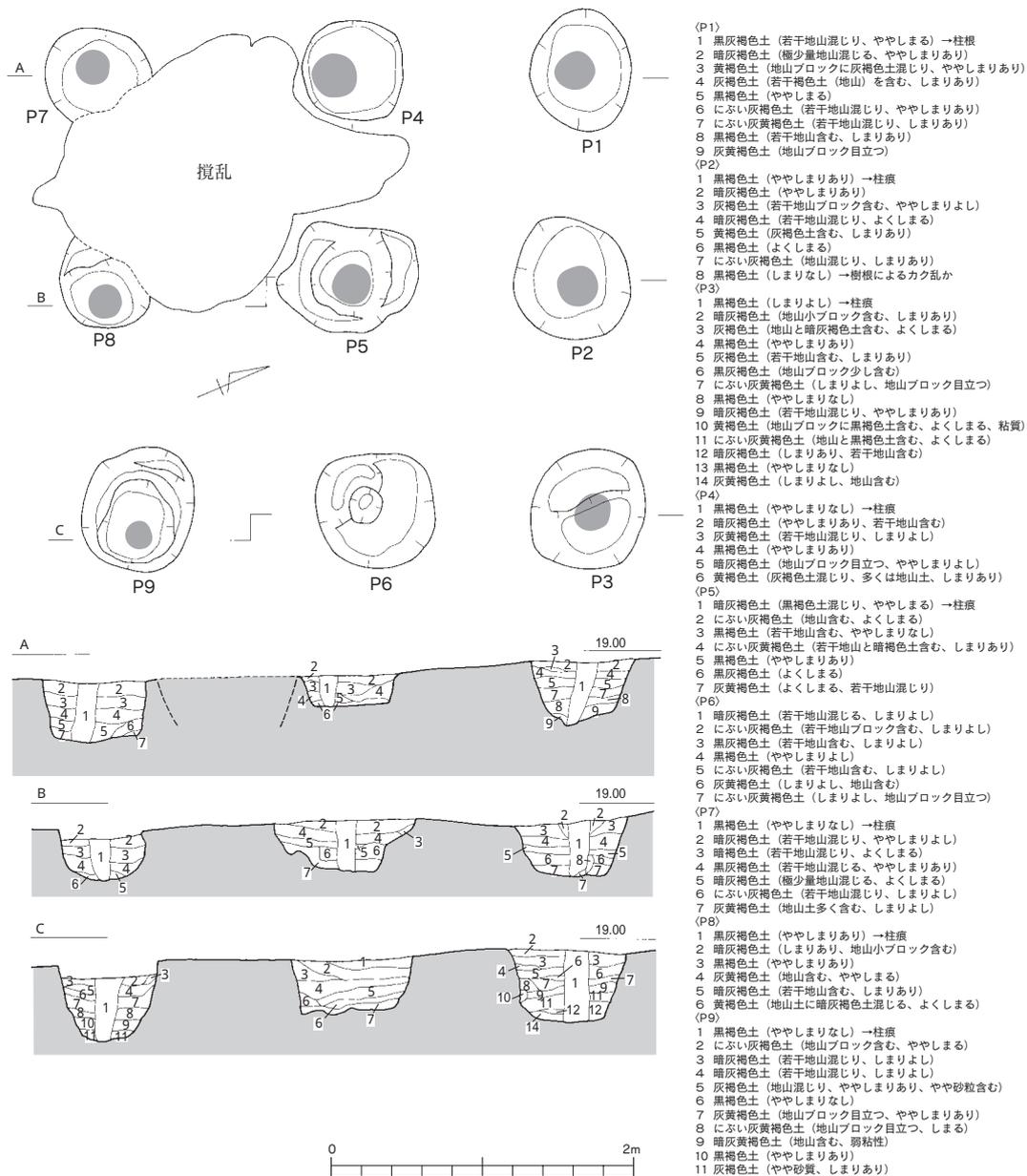
第16图 4·5号竖穴住居出土遺物実測図 (S=1/3)

b. 掘立柱建物

1号掘立柱建物 (第17図、図版8)

検出した掘立柱建物は1棟のみで、2間×2間の総柱構造である。柱穴の規模はほぼ一定で、径0.72~0.86m、深さ0.2~0.54m程度である。多くは検出面で柱痕を確認したが、P6だけは精査したが柱痕の確認に至らなかった。ただ、底部中央付近に皿状の凹みがあり、ここに柱が立っていた可能性はある。いずれの柱穴も土坑に直接柱を置いて、地山由来の黄褐色系の粘質土と旧表土の黒ボクに由来する黒色系の土とで互層状に埋めていた。柱痕の太さは、径11~17cmである。

柱穴からの出土遺物は、混入品である石器1点を除き皆無である。そのため建物の時期を直接知る手掛かりに欠けるが、1号掘立柱建物を切って掘削された攪乱埋土中から須恵器甕片が1点出土した。他遺構からの混入は考え難いので、本来柱穴に埋没していた須恵器片が攪乱の掘削により掘り出された可能性がある。この推定が当を得ているならば、遺構の時期は古墳時代後期頃に位置付けられる。



第17図 1号掘立柱建物実測図 (S=1/60)

(3) 古代の遺構

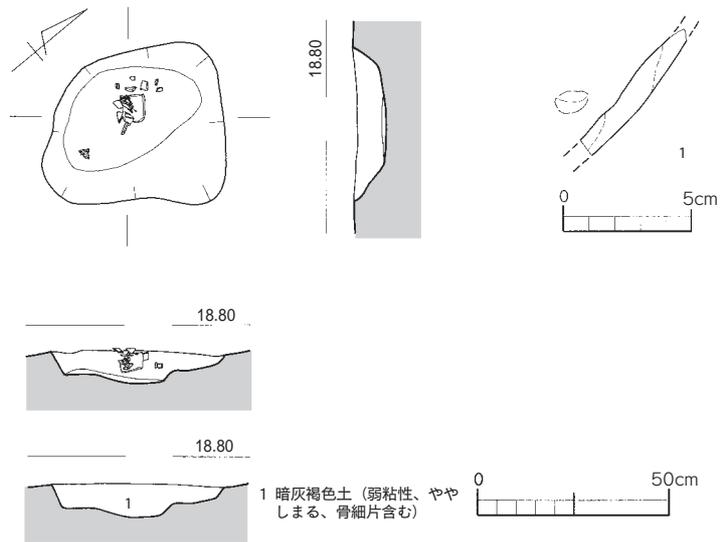
火葬墓 (第18図、図版8)

検出時には人骨が確認できず通常の土坑かと推定していた。ところが、少し掘り下げると人骨片が数点出土し、火葬墓であることが判明した。土器片は骨蔵器の一部とみられるため、遺構を半裁し土層を確認したが、すでに遺構の上部は後世に削平されており底部のみが遺存していた。

墓壙は0.43m×0.48mほどの不整形な方形を呈し、検出面からの深さはわずか9cmである。火葬骨はかなり小片で、皿状になった土師器甕胴部片(1)の上に出土した。他にも土師器片が出土したが、同一個体である。埋土は暗灰褐色土で、炭や灰などは混じらない。

以上から、まず土坑を穿った後に、火葬骨が入った土師器甕を安置しながら埋め戻したものと推定される。なお、土師器片が時期決定の手掛かりだが、小片なので判断し難い。しかし、骨蔵器に土師器甕などを転用することは奈良時代でも後半になってからが大半で、あるいは平安期に下る可能性も考慮する必要があるだろう。

ちなみに、甕は内面がナデ調整で、外面は磨滅しているが本来タテハケによる調整だろう。

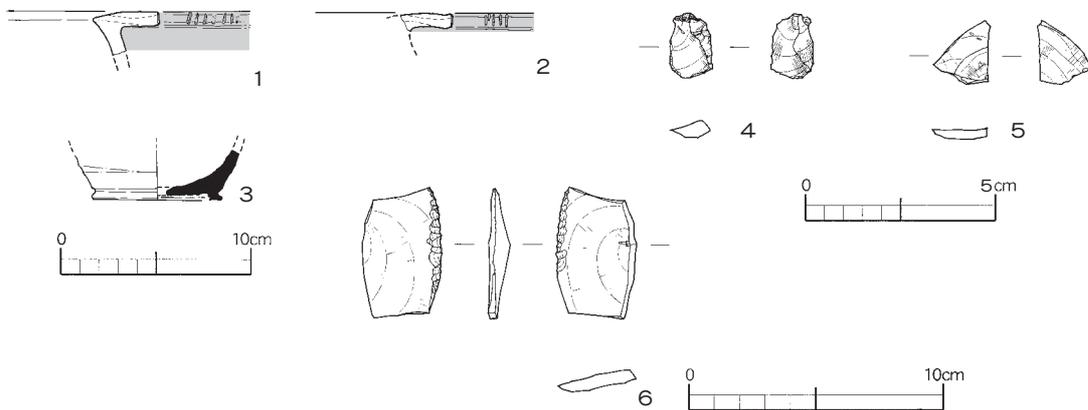


第18図 火葬墓及び骨蔵器実測図 (S=1/20,1/3)

(4) その他の遺物 (第19図)

検出時に数点の土器(1・2)・石器(4~6)が出土した。いずれも調査区の西側で出土しているが、まとまり等はないようである。

なお、調査地の北側の空き地で須恵器碗の小片(3)を表採した。これまで述べてきたように、当調査地では古代に位置付けられる遺構は火葬墓のみである。あるいは集落などが北側に存在する可能性もあるが、火葬骨蔵器である土師器甕の蓋として用いられていたと考える必要もあるかもしれない。表採地点が火葬墓とも近い位置であることから、全く否定される可能性ではないだろう。この点に関しては将来北側の調査が行われるまでの課題である。



第19図 表採遺物実測図 (S=1/2,1/3,1/4)

3. 考察

(1) 井上小松山遺跡3 火葬墓1号出土人骨について

鈴木克*・舟橋京子**・田中良之***

*九州大学大学院比較社会文化学府

**九州大学大学院人文科学研究院

***九州大学大学院比較社会文化研究院

1. はじめに

福岡県小郡市井上小松山遺跡3から人骨が出土し、九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座へ搬送され、同講座において、整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化学府考古人類資料室に保管されている。

2. 人骨出土状態

人骨は隅丸方形の墓壇内中央部付近と南側の2ヶ所から出土している。中央付近からは頭蓋骨・大腿骨片を初めとする複数の骨片が出土しており、南側からは人骨小片1点のみが出土している。

3. 人骨所見

【保存状態】

本人骨は火葬骨である。本人骨の保存状態はあまり良くなく細片化しており、細かい部位同定や観察が困難である。部位が特定できるのは以下の2点で、いずれも墓壇中央部付近からの出土である。頭蓋骨は左上顎骨の頬骨上顎縫合を含む左眼窩の下縁のみが遺存している。下肢骨は大腿骨後面の一部が遺存している。大腿骨の粗線は発達している。

【年齢・性別】

年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。性別は、大腿骨粗線が発達しているため、男性の可能性が考えられる。

4. まとめ

以上出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡出土人骨は保存状態があまり良くなく、計測に耐えうる人骨はなく形質的比較を行える個体は得られなかった。

最後に本報告にあたり、小郡市教育委員会各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。深謝したい。

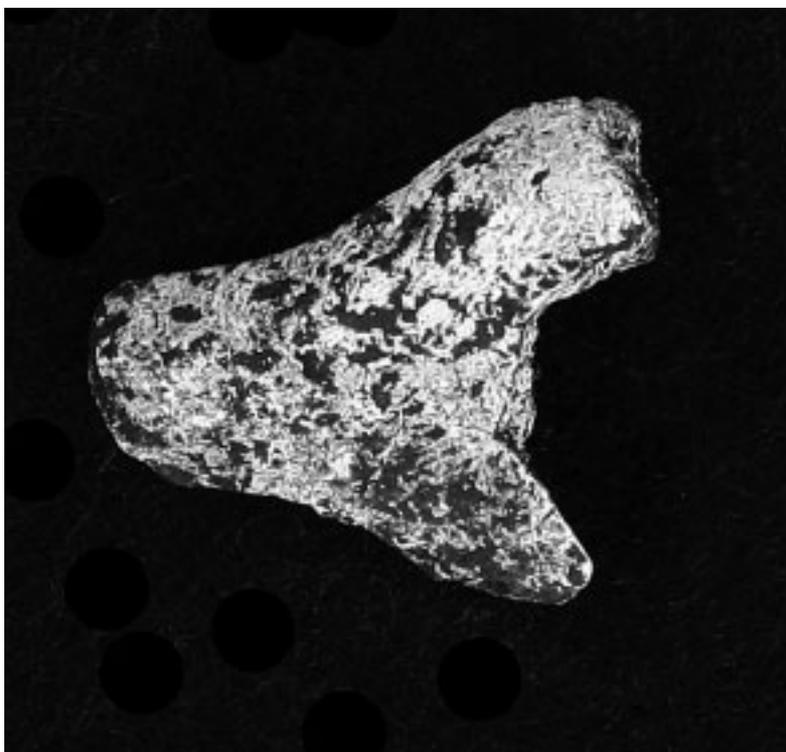


写真4 火葬墓1号人骨左上顎骨



写真5 火葬墓1号人骨大腿骨

(2) 火葬墓の検討

紙幅の都合上、詳細な検討はできないので、ここでは小郡市内で発見された古代火葬墓と火葬関連遺構について簡単にまとめてみたい。

これまで小郡市内では、古代の火葬墓が8遺跡18基確認されており、井上小松山遺跡3の火葬墓は19例目となる(表1)(註1)。周辺の市町村を見渡しても、一行政区域からの出土例としては比較的事例の多いほうである。このうち上岩田遺跡で発見された5基については、現在報告書作成にむけて整理中であるため、詳細は不明である。

No	遺跡名	所在地	骨蔵器の種類	共伴遺物	時期
1	横隈狐塚遺跡Ⅲ地点	小郡市横隈	土師器皿、黒色土器壺	火葬骨、唐式鏡、鉄鏃	9世紀前半
2	津古土取遺跡	小郡市土取	土師器甕	—	8世紀後半?
3	津古中ゾリ遺跡1号	小郡市津古	土師器皿、須恵器壺	火葬骨	9世紀前半
4	津古中ゾリ遺跡2号	小郡市津古	土師器甕、須恵器皿	火葬骨	9世紀前半
5	津古中ゾリ遺跡3号	小郡市津古	土師器甕	火葬骨	9世紀前半
6	津古中ゾリ遺跡4号	小郡市津古	土師器高杯・甕	—	9世紀前半
7	永浦遺跡B地点	小郡市三沢	土師器蓋・甕	土師器椀・杯・甕、鉄釘	9世紀前半
8	永浦遺跡C地点	小郡市三沢	須恵器短頸甕	火葬骨、土師器杯・皿	9世紀前半
9	永浦遺跡D地点1号	小郡市三沢	木櫃(or布?)	唐式鏡、須恵器壺、土師器 鉄鉢形土器、鉄釘、鉄滓	9世紀前半
10	永浦遺跡D地点2号	小郡市三沢	須恵器蓋、土師器甕	火葬骨	9世紀前半
11	勝負坂遺跡K地点	小郡市三沢	須恵器蓋・壺	火葬骨・須恵器杯	8世紀後半
12	干潟向畦ヶ浦遺跡1号	小郡市干潟	土師器皿・壺	—	9世紀前半
13	干潟向畦ヶ浦遺跡2号	小郡市干潟	土師器皿・長頸壺	—	9世紀前半
14	上岩田遺跡1号	小郡市上岩田			
15	上岩田遺跡2号	小郡市上岩田			
16	上岩田遺跡3号	小郡市上岩田			
17	上岩田遺跡4号	小郡市上岩田			
18	上岩田遺跡5号	小郡市上岩田			
19	井上小松山遺跡3	小郡市井上	土師器甕	火葬骨	9世紀前半?

表1 小郡市内の古代火葬墓一覧

まず、火葬墓の分布についてみてみよう。従来は三国丘陵における大規模開発に伴う発掘調査により火葬墓が発見されており、宝満川の西岸に集中する傾向が指摘されていた(佐藤1996)。しかし、その後の調査の進展により、上岩田遺跡で複数の火葬墓が発見され、さらに今回井上小松山遺跡3においても1基の火葬墓を発見するに至り、宝満川の東岸においても火葬墓の事例が増加してきた。その結果、宝満川の東西でほぼ同数の火葬墓が営まれていたことが判明してきた。

火葬墓の立地をみると、宝満川西岸の事例が丘陵斜面に位置するのに対して、東岸の事例はいずれも比較的平坦な台地に位置している。井上小松山遺跡3火葬墓もすぐ南側には小さな谷が存在す

るが、火葬墓の位置する場所は谷への落ち部よりもずっと内側の平坦地である。この立地の相違は宝満川の西岸に三国丘陵があり、西岸には花立山以外に顕著な丘陵が存在しないという相違に起因する可能性もあるが、例えば干潟向畦ヶ浦遺跡の例などは花立山とも近距離にあり、井上小松山遺跡3火葬墓ではあと10メートルほど南には谷に面した傾斜地がある。にもかかわらず、平坦地に営んでいるという点は注目できる。視点を変えれば、今回発見した井上小松山遺跡3火葬墓は宝満川東岸の火葬墓の特徴をよく表しているといえる。

次に、造営された時期をみると、ほとんどが9世紀前半代に位置付けられる。古い事例では、勝負坂遺跡K地点で発見された所謂「葉壺形」と称される有蓋短頸壺が8世紀後半まで遡る他は、津古土取遺跡火葬墓が8世紀後半まで遡る可能性がある程度である。つまり、8世紀代の火葬墓はほとんど皆無に等しく、9世紀代になって爆発的に増加するという傾向が認められる。当然、火葬墓の発見は多くが偶発的であるため、未発見の事例は当然存在すると考えるべきだろうが、それにしても上記の傾向は小郡市内における火葬墓のあり方の大要を示していると考えられる。そうすると、かつていわれていたような「古墳から火葬墓へ」という変遷は少なくとも小郡市域では見出しがたく(佐藤1996)、基本的には古墳から木棺墓や土壙墓といった土葬墓へという変遷があり、8世紀後半ごろから徐々に火葬墓も行われるようになるという理解が穏当であろう。

続いて、骨蔵器に着目すると、唯一8世紀後半に遡る事例である勝負坂遺跡K地点火葬墓出土の短頸壺が「葉壺形」という典型的な骨蔵器であるのに対して、その他の事例は土師器の皿・高坏・甕や須恵器の長頸壺など日用器種が転用されている。「葉壺形」という点では、津古中ゾリ遺跡1号火葬墓も有蓋短頸壺を使用しているが、蓋には土師器皿が転用されており、組合せとしてはやはり新しい時期の特徴を有するといえよう。なお、永浦遺跡D地点1号火葬墓では土器ではなく木櫃を使用した可能性が指摘されており、新しい段階には土器以外の容器の使用が認められるようになるのであろうか。ただし、全国的にみても木櫃の使用は極めて稀であり、今後も検討を要する。

井上小松山遺跡3火葬墓に関しては、これまで小郡市内で発見された火葬墓の中で最も骨蔵器の遺存状況が悪く、土師器甕の胴部片だけであった。しかし、土師器甕を使用しているという点に日常容器の転用であることが窺え、他の事例との比較からすると8世紀代よりむしろ9世紀代に位置づける方が蓋然性が高いように思われる。

最後に井上小松山遺跡3火葬墓の位置付けを考えてみたい。

井上小松山遺跡の周辺では、井上薬師堂東遺跡・井上南内原遺跡・井上東山ノ後遺跡などで7～8世紀の集落が確認されており、南側数百mという近距離に集落が存在したことになる。また、当時の墓地としては、すぐ東側の井上小松山遺跡1において奈良時代の土壙墓が発見され、井上薬師堂東遺跡でも7～9世紀にかけての土壙墓が10基程度発見されている。ちなみに、井上小松山遺跡1では焼土坑が3基確認されており、報告では落とし穴状遺構と同時期かとされているが、火葬と関わる焼土坑の存在も指摘されており、再考を要する。

この他、井上地区には7世紀末ごろに建立された井上廃寺が存在し、少なくとも8世紀中ごろまでは機能していたと推定されている。さらに、井上廃寺と同じ瓦が北薬師堂遺跡や北大門遺跡、井上南内原遺跡、井上東山ノ後遺跡などで出土している。

こうしてみると、井上地区には集落・墓地・寺院など古代の様々な性格の遺跡が分布しており、集落や寺院などの居住域の比較的近辺に墓地が存在するという空間配置が窺える。この地区の集落はおそらく井上廃寺の造営氏族とも深く関わっていた。氏族の長は上岩田遺跡に本拠を置いていた可能性

もあるが、井上地区の集落と全く無関係であったとはいえないだろう。そうすると、井上小松山遺跡3火葬墓は井上地区の集落の縁辺部に所在するという地理的条件からしても、井上廃寺造営氏族と何らかの関係を有していたとみるのが適当だろう。ただ、井上廃寺とは時期的には隔たりがあるため、直接の造営者と関わりがあるとはいえない。

なお、注意が必要なことは、井上廃寺造営氏族との関わりが指摘できるからといって、井上小松山遺跡3の火葬墓が仏教と関わって営まれたとは断定できないということである。この点は、寺院の造営時期との齟齬が認められることから窺える。また、既述のように小郡市内の火葬墓は9世紀前半になって爆発的に増加するが、小郡市内では上岩田廃寺や井上廃寺など7世紀末ごろから寺院の造営が展開しており、この地域への仏教伝来からなぜ1世紀近くも経てからでしか火葬墓が展開しないのか説明がつかない。学史的には火葬墓と仏教とを関連付ける見解も示されていたが、今回通覧してきた状況はその見解にとっては不都合ではないだろうか。

さて、ここまで小郡市内の資料をもとに若干の検討を進めてきたが、紙幅の都合上触れ得なかった論点も多く、その点に関しては今後に委ねたい。また、事例は少ないものの、着実に火葬墓の類例も増加してきており、今後発掘調査が進めばまた新たな事実が判明すると思われ、その段階で改めて検討をする必要があるだろう。

【註】

1. 表1で列挙した以外に、干潟遺跡で火葬墓とされる遺構が発見されている（福岡県教委1980）。1辺60cm弱の二段掘り隅丸方形土坑で、埋土中に骨片と炭を含んでいることから火葬墓と推定されているが、骨蔵器は全く確認されていない。骨蔵器に関しては有機質性の可能性も残るが、火葬墓と断定する材料に乏しく、今回は火葬関連遺構とするにとどめた。

【参考文献】

- 小郡市教育委員会1986『横隈狐塚遺跡Ⅲ』小郡市文化財調査報告書第29集
小郡市教育委員会1986『津古中ゾリ遺跡』小郡市文化財調査報告書第33集
小郡市教育委員会1990『津古土取遺跡』小郡市文化財調査報告書第59集
小郡市教育委員会1995『苺又地区遺跡群Ⅰ』小郡市文化財調査報告書第101集
小郡市教育委員会1995『苺又地区遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第103集
小郡市教育委員会1996『苺又地区遺跡Ⅲ』小郡市文化財調査報告書第104集
小郡市教育委員会1996『苺又地区遺跡Ⅳ』小郡市文化財調査報告書第105集
小郡市教育委員会1998『干潟向畦ヶ浦遺跡』小郡市文化財調査報告書第119集
小郡市教育委員会2000『上岩田遺跡調査概報』小郡市文化財調査報告書第142集
小郡市教育委員会2004『井上小松山遺跡1・2』小郡市文化財調査報告書第191集
佐藤雄史1996「火葬墓の普及」『小郡市史』第1巻 通史編
福岡県教育委員会1980『干潟遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第59集

IV. 井上小松山遺跡4の調査の内容

1. 調査の概要 (第20図)

この調査は、前章で報告した井上小松山遺跡3の北西隣に位置する台地部分と、そのさらに北西側に延びる谷部分の一部が対象となった。しかし調査に要する重機と人員の搬入、廃土の搬出ルートが調査区南東側からのみに限定され、調査段階では南東側と調査区遺構検出面とが約2mの比高差を持つ状況であったため、一括しての調査は困難であった。そこでまず台地部分の調査を行ない、調査区を埋め戻した後にその上を縦断する形で谷側へ重機を搬入し、表土掘削および調査を実施することにした。結果としては、表土を剥いだ時点で谷の傾斜部分には遺構が残存しないことが判明し、地形の記録を残して埋め戻しを行っている。また谷の落ち込み部分は沼地状の緩い地質であり、重機の搬入に危険が伴ったことと、比較的地盤が堅固な部分に試掘坑を設定した結果、遺構・遺物の存在を確認できなかったことから、調査対象区からは除いた。

調査地は元々福岡県甘木農林事務所の所管である試験林であったため、井上小松山遺跡3や平成15年度に同じ道路改良工事に伴って調査された井上小松山遺跡1・2と同様、多数の樹木痕が攪乱となって遺構を破壊していた。遺構検出面は現地表面から0.15~0.4m下にあり、掘り込み面は黄褐色~褐色ロームを主体とする基盤層である。表層には黒褐色の腐食土が堆積していた。

確認した遺構は、弥生時代の円形竪穴住居1軒、祭祀土坑1基を含む土坑7基、溝状遺構4条、ピットなどである。遺物は円形竪穴住居からまとまった出土を見せた他は、各遺構から微細な縄文土器・弥生土器が出土したのみである。また遺構の掘り込み面は、調査区中央部の南半部において一部黄褐色土の遺物包含層で覆われており、そこから縄文土器の細片・少量の石器類が出土している。

2. 遺構と遺物

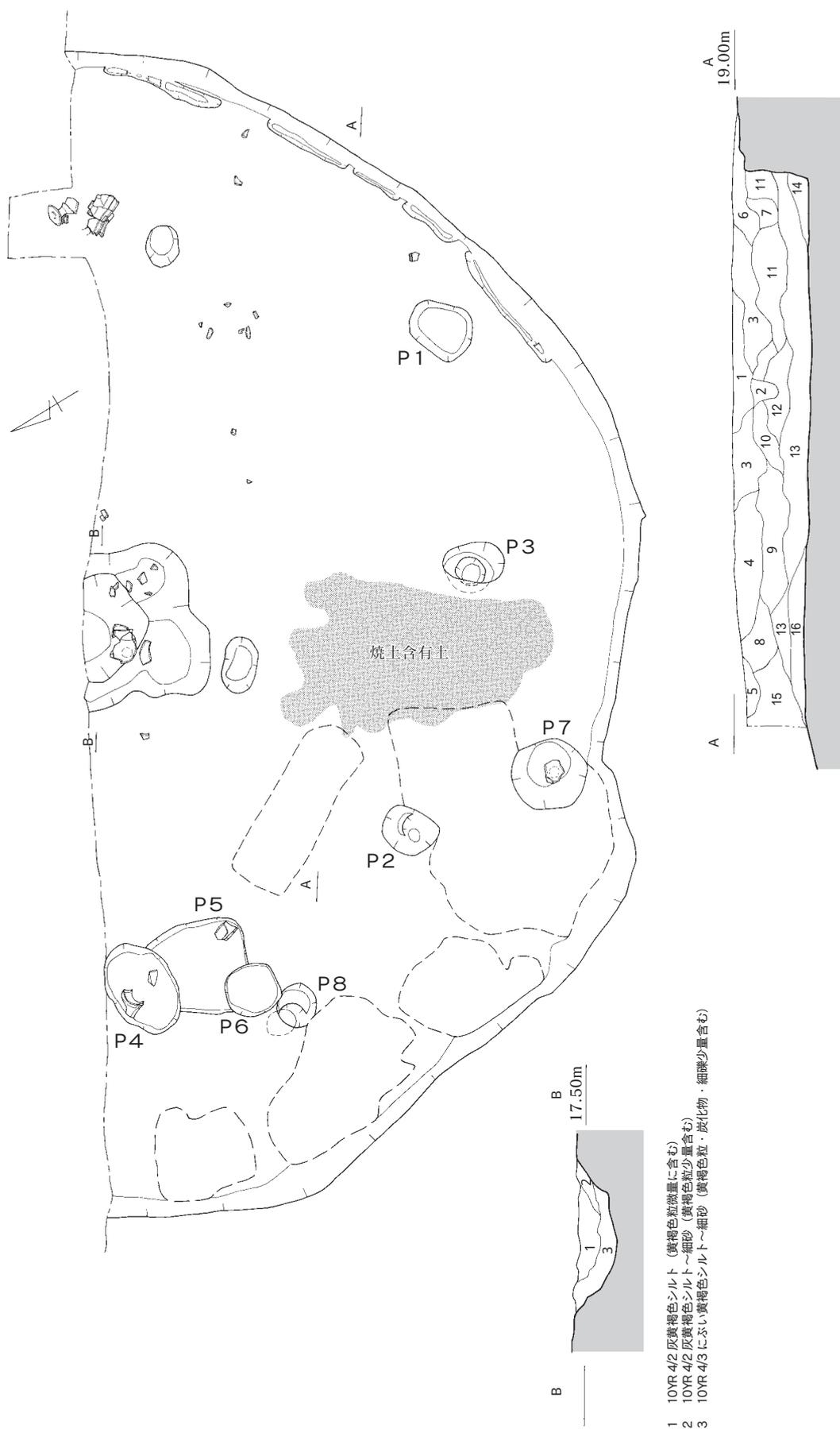
a. 竪穴住居跡

円形竪穴住居 (第21図、図版13)

調査区北東に位置し、遺構のおよそ半分が調査区外へ延長する。検出した弧から復元すると直径8.0mの正円形を呈する、大型の住居であると考えられる。深さは最大0.5mを測り、壁面は垂直に立ち上がる。弧は南側で一部不整なラインを描くが、この部分は植樹痕跡によって破壊されていた。南東の壁際に沿って、部分的にであるが幅0.1m弱の浅い小溝が掘り込まれている。北西部は上部をやはり植樹によって、下部を植樹の移し変えに伴う機械掘削で削平されていたが、床面はほぼ全体で検出できた。遺構の残存状況は比較的良好であると言える。貼床は東側の一部のみに薄く施されており、構築段階で平坦な床面を意識して掘り込んでいる。遺構の中央には不整形の深さ0.3mの土坑が掘削されており、埋土下層から弥生時代中期の甕片がまとまって出土している。しかし調査区内においてはこの土坑の周辺には柱穴は認められなかった。主柱穴については、床面上で複数のピットを確認しているが、いずれも規則的な配置は見せず、深さも不十分と思われるものが多数であった。多くは住居と同じ時期の遺物を伴うため、遺構に伴うものとは判断できる。またピット2とピット5が4主柱穴となり、調査区外に並びが延長する可能性は残る。南西部には焼土と炭化物ブロックを含む土の堆積を検出している。断割を入れて堆積状況を確認した後掘削を行なっているが、かまど廃棄行為を示す遺物・痕跡はみられなかった。埋土は上層が褐灰色シルト、中・下層が暗褐色シルトを主体とし、含有物に差は見られるが全体に共通性が高い。中央の屋内土坑についても、住居本体の埋土と類似する様相を示す。遺物は埋土下層と遺構床面直上を中心に出土している。いずれも弥生時代中期後半~末



第20図 井上小松山遺跡4 遺構配置図 (S=1/250)



- 1 10YR 4/2 灰黄褐色シルト (黄褐色粒微量を含む)
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色シルト～細砂 (黄褐色粒少量含む)
- 3 10YR 4/3 にふい黄褐色シルト～細砂 (黄褐色粒・炭化物・細砂少量含む)

- 1 10YR 3/3 暗褐色シルト～細砂 (炭化物微量を含む)
- 2 10YR 2/3 黒褐色シルト～細砂 (細砂微量を含む)
- 3 10YR 3/2 黒褐色シルト～細砂 (細砂・黄褐色粒微量を含む)
- 4 10YR 2/2 黒褐色シルト (黄褐色粒微量を含む)
- 5 10YR 2/1 黒色シルト (細砂・黄褐色粒少量含む)
- 6 10YR 4/2 灰黄褐色シルト～細砂 (黒褐色・黄褐色ブロック中量含む)
- 7 10YR 4/2 灰黄褐色シルト～細砂 (黒褐色・黄褐色ブロック中量含む)
- 8 10YR 3/3 暗褐色シルト～細砂 (細砂・黄褐色粒極微量を含む)
- 9 10YR 2/3 黒褐色粘土～細砂 (炭化物・黄褐色ブロック微量を含む)
- 10 10YR 3/3 暗褐色シルト～細砂 (黄褐色粒・土器片微量を含む)
- 11 10YR 4/2 灰黄褐色シルト～細砂 (細砂・黄褐色粒少量含む)
- 12 10YR 4/2 灰黄褐色シルト～細砂 (黒褐色・褐色・黄褐色ブロック中量含む)
- 13 10YR 4/3 にふい黄褐色シルト～細砂 (褐色・黒褐色・黄褐色ブロック中量含む)
- 14 10YR 4/2 灰黄褐色シルト～細砂 (黒褐色・黄褐色ブロック中量含む)
- 15 10YR 4/1 相灰色粘土～細砂 (黄褐色粒極微量を含む)
- 16 10YR 3/1 黒褐色シルト～細砂 (橙色粒中量・炭化物多量を含む、しまり悪い)

第21図 円形竪穴住居実測図 (S=1/40)

の所産である。

出土遺物（第21図、図版15）

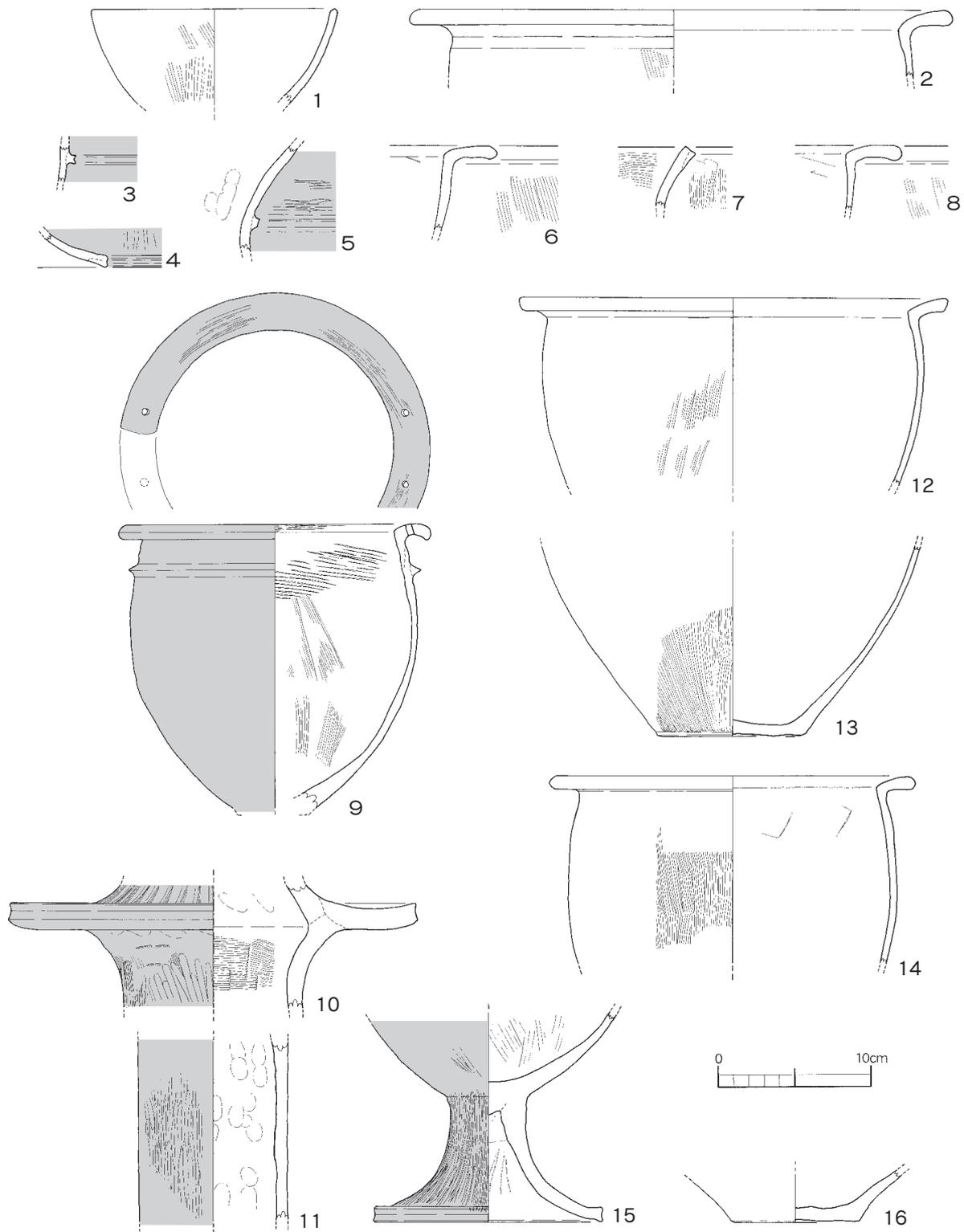
住居の床面および屋内土坑を中心にまとまった量の土器が出土している。埋土上・中層からの出土は極めて少ない。また出土した土器はいずれも破片資料で、原型に復元が可能だったのは土坑内および遺構図に図示した北東部のもののみである。

1は小型の鉢。口縁端部を丸く仕上げ、外面に粗略なタテハケを施す。2は甕の口縁。須玖式の特徴である逆L字型口縁で端部はわずかに傾斜をもつ。口縁内部の稜は緩やか。いずれも埋土中層からの出土。3はM字突帯を貼り付け、丹塗りを施した甕の体部。5は同じくM字突帯を頸部に貼り付けた壺類の口縁部か。内面は指オサエの残る粗い造りだが、外面は丁寧なヨコミガキ。3・5は床面直上での出土。4は器台の高杯の脚端部。外面には丹塗りと丁寧なタテミガキを施す。焼土含有土からの出土。6は甕の口縁で逆L字型を呈し、端部にわずかな稜を持つ。外面にタテハケを施した後、口縁部とその縁辺をヨコナデ調整。2と同時期の所産、床面直上での出土。7は器台の上端部。先端は面をもって処理され、外面にタテ、内面にヨコの丁寧なハケ調整を施す。以上は中期後葉の所産。8は甕の口縁、逆L字型をとるがやや下方に垂れ下がり気味。12・13は甕、同一個体と思われる。口縁部は逆L字型でやや内傾気味、丁寧なヨコナデを施し端部はわずかに稜をもつ。内面は単位不明だがヘラ状工具によるヨコナデ、外面はタテハケを施す。底部は若干中央部が盛り上がる。14は口縁が逆L字型をとる甕で内面工具ナデ調整、外面タテハケ。7・8、12～14は屋内土坑下層からの出土で中期末の様相が濃い。9は丹塗りの中型鉢。口縁は逆L字型を呈するが、外側に明瞭に湾曲する。ハケ状工具で平坦面を調整し、4箇所穿孔を施す。頸部に断面三角形の突帯を貼り付け、外面は丁寧なナデ調整、内面は口縁部から頸部にかけて幅広のヨコハケ調整の後、体部に細かいタテハケを施す。外面全面に丹塗りを施し、一部は内面にも垂れ落ちている。遺構東端の床面直上で出土、中期末の所産。10は筒型器台の鏝部分。上面は3本を1組とする放射状暗文、下面は丁寧なナデ調整を施し、鏝の下部はタテハケ後タテミガキを行なう部分とタテハケのみの調整部分が混在している。内面は上部に指オサエが多数残り、下部はヨコハケを施す。ピット4の底面から出土、中期末の所産。11は筒型器台の体部。内面にはナデ消しを施しているものの指オサエ痕跡が多く残る。外面は丁寧なタテミガキ。ピット5からの出土で中期末の所産。10・11とも外面全体に丹塗りを施す。15は高杯。杯部内面は放射状にケズリを施した後不定方向の幅広のハケ調整。外面は摩滅気味だがタテハケの痕跡がわずかに残る。脚部内面は絞込み痕跡が明瞭に残り、外面は接合部から端部まで1単位の丁寧なミガキ調整を施す。杯部全面と脚部外面に丹塗りを施し、一部脚部内面にも流れ込みが見られる。9とほぼ同位置で出土、中期末の所産。16は甕の底部。底部から広がりをもって体部が立ち上がる。調整は全面摩滅が激しく不明。ピット7からの出土で中期末の所産。

b. 土坑

SK01（第23図、図版13）

調査区東寄りに位置し、東西両端を植樹の攪乱により削平されている。長軸2.6m・短軸残存長1.6m・深さ0.9mを測る。遺構壁面は垂直もしくはややえぐれて立ち上がる。平面プランは楕円形を呈すると思われる、主軸は正方位から東にふる。北側に1段、南側に2段のテラスを持ち、南側については埋め戻しの際にこれを意識した状況が確認できた。規模やプランは異なるが、井上小松山遺跡3でも検出されている立柱儀礼関連の遺構か。埋土は暗褐色・褐灰色シルトを主体とし、円形住居のもの



第22図 円形竪穴住居出土遺物実測図 (S=1/4)

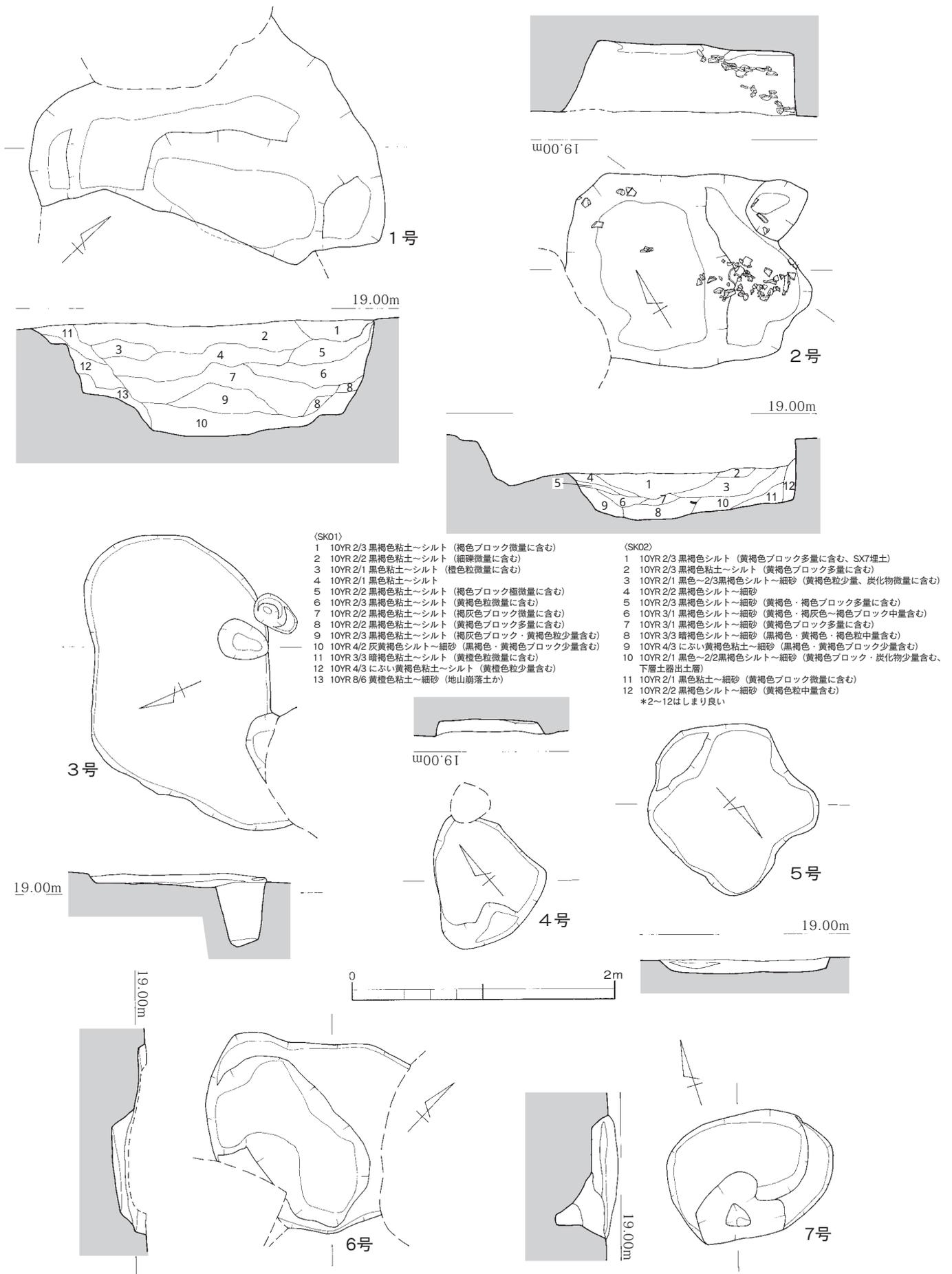
のと酷似すること、また立地も近接していることから同時期の関連する遺構と考えられる。

出土遺物 (第24図、図版16)

微量の縄文土器片と石器が1点出土している。1は砂岩の砥石で3面に研磨痕を残す。各部に二次的な破損が見られることから、転用した可能性もある。

SK02 (第23図、図版14)

調査区東端に位置し、上部を植樹の攪乱により削平されている。第20図では上面攪乱の番号を付し



第23図 1～7号土坑実測図 (S=1/40)

てSX07で掲載している。検出面から下0.4mまではSX07、それより下がSK02の埋土となる。掘削開始段階から小片ではあるが多数の遺物が出土したため、SX07・SK02のいずれに属するかは問わず記録をとっており、上面のまとまりがSX07掘削時に下層から巻き込まれた混入遺物、下面のまとまりがSK02の出土品となる。遺構は長軸1.7m・短軸1.5m・遺構検出面からの深さは0.6mを測り、SK02の残存深は最大で0.3mである。主軸は正方位から西にふる。遺構壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを主体とし、SK01や円形住居とは異なる。人為的に埋め戻したと見られる。

出土遺物 (第24図、図版15・16)

ここでは出土品の全てをSK02の遺物として紹介する。2～6・8は甕の口縁部。いずれも口縁部は逆L字型で平坦面をハケ状工具でナデ調整した後、放射状に暗文を施す。端部は明瞭に稜を持ち、刻みを施す。口縁部は内側に向かって凸状に突出する。内面は丁寧なナデ調整を行い、頸部にはM字型突帯を貼り付け、口縁の張り出し部分との境にはタテハケが見られる。外面には丹塗りを施すが、一部が内側へ垂れ込んでおり、2では頸部付近までいたる。遺構上層・下層の双方から出土、中期後葉の所産。7は頸部に突帯をもつ壺の破片。突帯は断面長方形を呈し、内面は丁寧なヨコナデ、外面はナデの後丹塗りを施す。摩滅のためミガキ調整の有無は不明である。9～12は甕の底部。9は底部からやや外傾して体部が立ち上がるもの。底部内面には指頭圧痕が残り、その上部は指ナデで仕上げる。外面はタテハケ。10～12はすぼまった底部からさほど外傾せずに体部が立ち上がるもの。10は外面を幅広のタテハケで、11・12は細かいタテハケで調整。いずれも底部内面には体部接合時の指頭圧痕が残る。9は中期末、10～12は中期後葉の所産か。13・16は甕の体部。口縁部は逆L字型を呈するが、やや内傾気味でナデ調整。体部は幅広のタテハケ、内面は単位不明だが板状工具によるナデ調整を施す。13は口縁部の平坦面に暗文状の放射線が数箇所認められる。14・15は高杯の脚部。14は外面に丹塗りを施した後、端部から上方まで1単位の丁寧なタテミガキを行なう。内面はヨコハケ調整で、丹塗りの垂れ込みが認められる。15は杯部の一部も残存しているが、杯～脚部に丹塗りを施した後タテミガキ。内面には絞り込み痕跡を残す。本遺跡で出土した弥生土器の多くは胎土が浅黄橙色だが、15は赤橙色である。

SK03 (第23図)

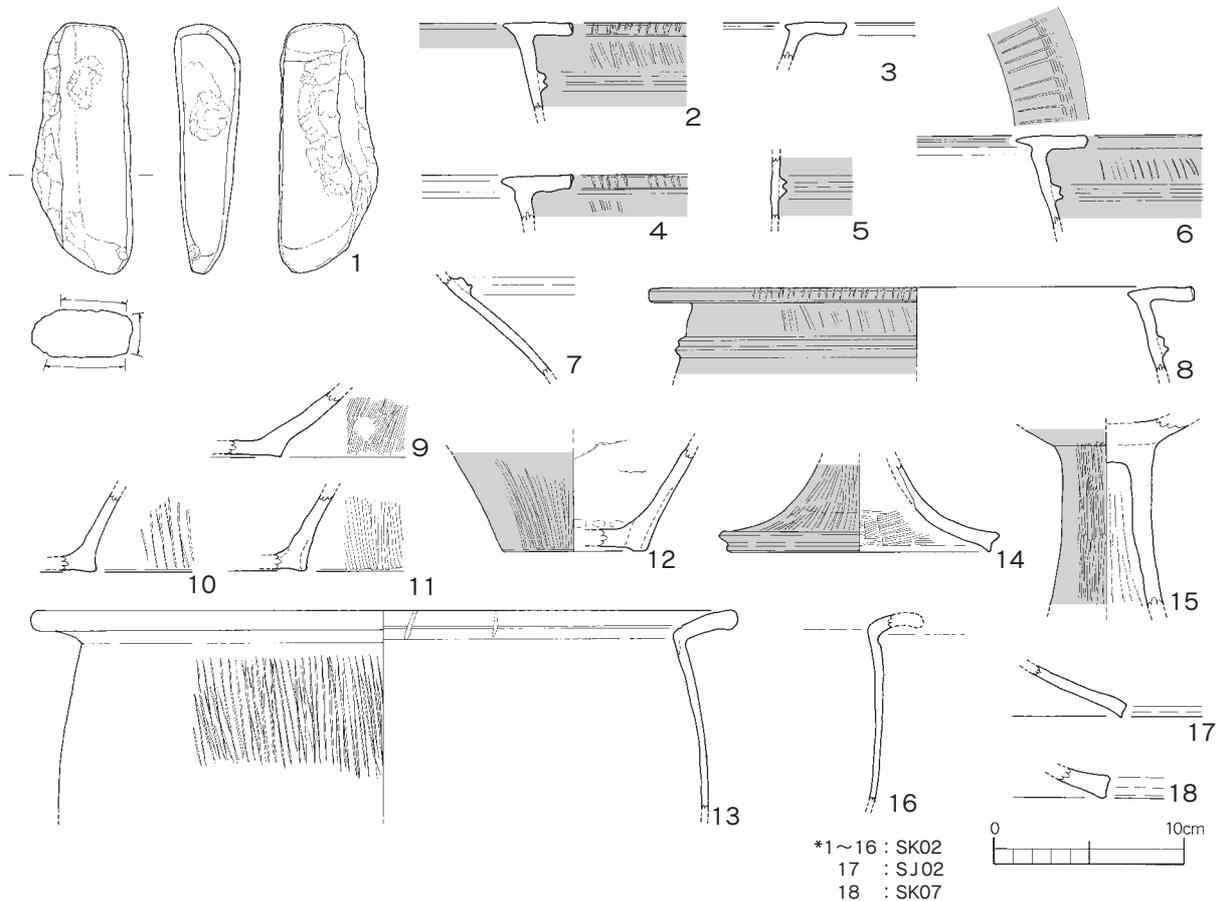
調査区中央北端に位置し、上部を後世の造成により削平されている。長軸2.0m・短軸1.4m・深さ0.1mを測り、主軸は東西軸から南にふる。遺構壁面は若干の傾斜をもって立ち上がる。平面プランは楕円形を呈する。南西隅をわずかだが植樹の攪乱に切られる。遺構底面に径0.3m・深さ0.5mのピットを検出しているが、土坑に伴うものかどうかは不明である。埋土は灰黄褐色砂質土1層で、検出面の土と酷似する。流れ込みによる埋没か。縄文土器の細片が出土しているが掘り込み面からの混入と思われる。

SK04 (第23図)

調査区中央南端に位置し、長軸1.0m・短軸0.85m・深さ0.1mを測る。主軸は正方位から西にふる。平面プランは不整円形を呈し、南に小規模なテラスを持つ。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は灰黄褐色土1層で、検出面の土と酷似する。流れ込みによる埋没か。遺物は全く出土していない。

SK05 (第23図)

調査区中央南端に位置し、直径1.3mの不整円形を呈する。深さは0.1mを測り、主軸は正方位と想定できる。南側に小規模なテラスを持つ。壁面は緩やかな傾斜を持って立ち上がる。埋土は灰黄褐色土1層で、検出面の土と酷似する。流れ込みによる埋没か。遺物は全く出土していない。



第24図 土坑・落とし穴状遺構出土遺物実測図 (S=1/4)

SK06 (第23図)

調査区ほぼ中央に位置し、南北両端を植樹による攪乱に削平されている。長軸残存長1.3m・短軸1.4m・深さ最大0.25mを測る。壁面は傾斜をもって立ち上がる。主軸は正方位から東にふる。遺構底面の南側に土坑状の掘り込みを持つ。埋土は褐灰色土1層であった。遺物の出土は見られない。

SK07 (第23図)

調査区北寄り西側に位置し、長軸1.3m・短軸0.9m・深さ0.2mを測る。壁面は傾斜をもって立ち上がる。主軸はほぼ東西方向、南端に径0.5m・深さ0.4mの不整形ピットを持つ。埋土は褐灰色土1層であった。

出土遺物 (第24図)

18は弥生時代の高杯脚部端部の小片。全体に摩滅が激しく調整は不明であるが、端部の形状から丹塗り・放射状研磨を施した中期後葉から末にかけてのタイプと思われる。

c. 溝状遺構

SD01 (第20図)

調査区東側北端に位置し、東西方向に流れる。東西両端を植樹により削平されている。円形住居との先後関係は調査では確認できなかったが、埋土がしまりのやや悪い黒褐色シルトを主体としていることから、こちらが新しい可能性が高い。幅0.2m・深さ0.2mを測り、断面はU字型を呈する。遺構底面は階段状の段差を持つほか、掘削時の工具痕と見られる多数の凹凸を確認している。遺物は出土

していない。

SD02 (第20図)

調査区中央西寄りに位置し、北東から南西に流れる。南半部の上面を植樹により削平されている。北端で西側へ屈曲する。最大幅0.6m・深さ0.7mを測り、断面はいびつなU字型を呈する。埋土は検出面と類似する灰黄褐色砂質土を主体とし、流れ込みで埋没したと思われる。遺構底面は部分的にピット状あるいは土坑状の落ち込みが見られ、壁面際にも小溝状、テラス状の段差が多数残存していた。他遺構との関連や遺構の性格は不明である。遺物の出土は見られない。

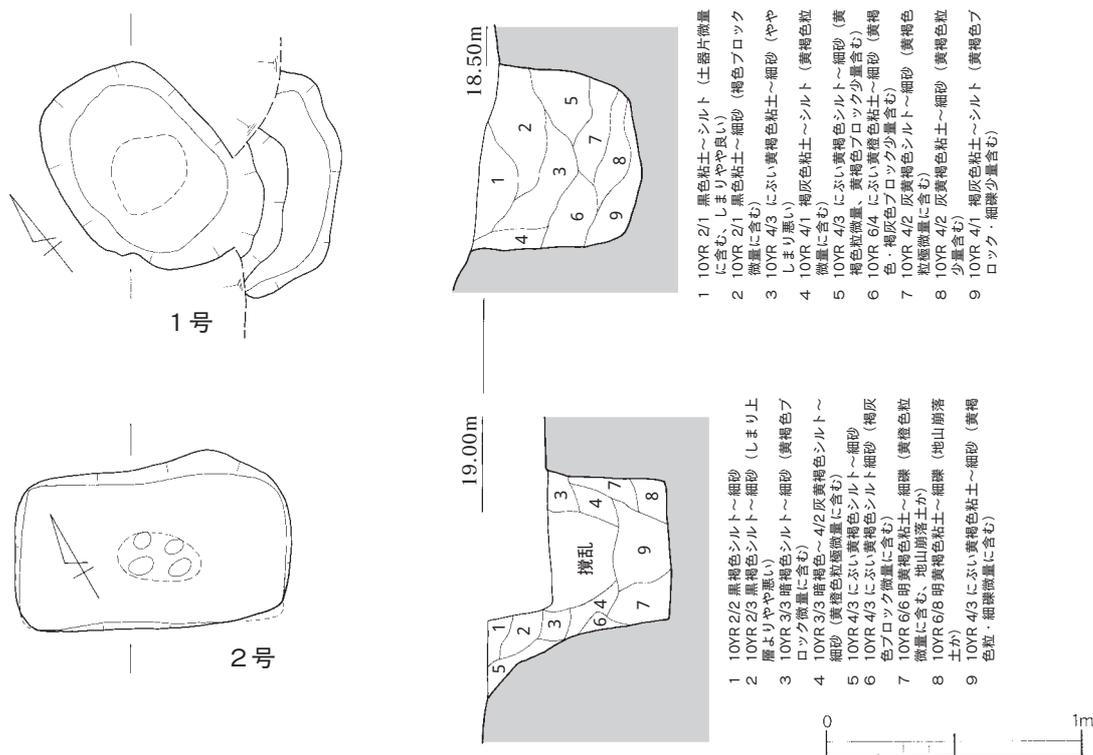
SD03 (第20図)

調査区中央西端に位置し、北から南へ流れる。南端を植樹により削平されている。幅0.4m・深さ0.6mを測り、断面はU字型を呈する。埋土は検出面と類似する灰黄褐色砂質土を主体とし、流れ込みで埋没したと思われる。遺構底面には階段状の段差を持つ。周辺に連続する溝状遺構の痕跡は確認できなかったが、遺構検出面における傾斜変換点に最も近い溝であり、この台地上に営まれた集落の境界的な機能を果たした可能性がある。遺物は出土していない。

d. 落とし穴状遺構

SJ01 (第25図、図版14)

調査区中央北寄りに位置し、上部を植樹により大幅に削平されている。東側にわずかに構築時の掘り込みラインが残存する。長軸残存長0.9m (復元長1.45m)・短軸残存長1.0m (復元長1.3m)・深さ1.3mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、深さ0.1m程度のテラスを経て検出面にいたる。主軸はほぼ正方位を示す。検出プランは楕円形だがこれは後世の崩落に伴う変形であり、本来のプランは隅丸長方形と思われる。底面には25図において点線で示したように基盤層に別の土が混じった部分が存在したため半裁したが、杭の打ち込み痕等は確認できなかった。埋土は黒褐色シルトを主体とし、



第25図 落とし穴状遺構実測図 (S=1/30)

全体にしまりは良い。人為的に埋め戻されたと考えられる。

SJ02 (第25図、図版14)

調査区北寄り西半部に位置し、上部全体を植樹によって削平されている。植樹攪乱の存在を明確にするための掘削において遺構の端部を確認し、調査にいたった。長軸残存長1.1m・短軸残存長0.7m・残存深は最大で0.8mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がった後、緩やかに傾斜して検出面へいたる。本来の形状はSJ01と同じタイプで、同時期に構築されたものと考えられる。平面プランは四隅のしっかりした長方形を呈する。主軸は東西方向を示す。底面には25図において点線で示した別埋土の混入部分と杭と思われる小規模な円形プランを検出している。埋土は黒褐色シルトを主体とし、人為的に埋め戻した様相を示す。

出土遺物 (第24図)

極めて微細ではあるが弥生土器片が出土している。17は高杯の脚端部と思われる。摩滅により調整は不明だが、後期の所産と考えられる。

これらの落とし穴状遺構については、近接する井上小松山遺跡1・2において同形態の遺構が4基検出されている。いずれも主軸方位は若干異なっているが、落とし穴状遺構はその立地や周辺地形を鑑みた上で構築されるのが通例であるため、関連を否定する積極的な根拠とはならない。特にSJ02については既調査において検出された落とし穴状遺構と底面レベルがほぼ一致することもあり、遺跡の所在する台地上で展開された狩猟に関する一連の痕跡と判断して良いだろう。

e. 調査区北西端の地形変換点について

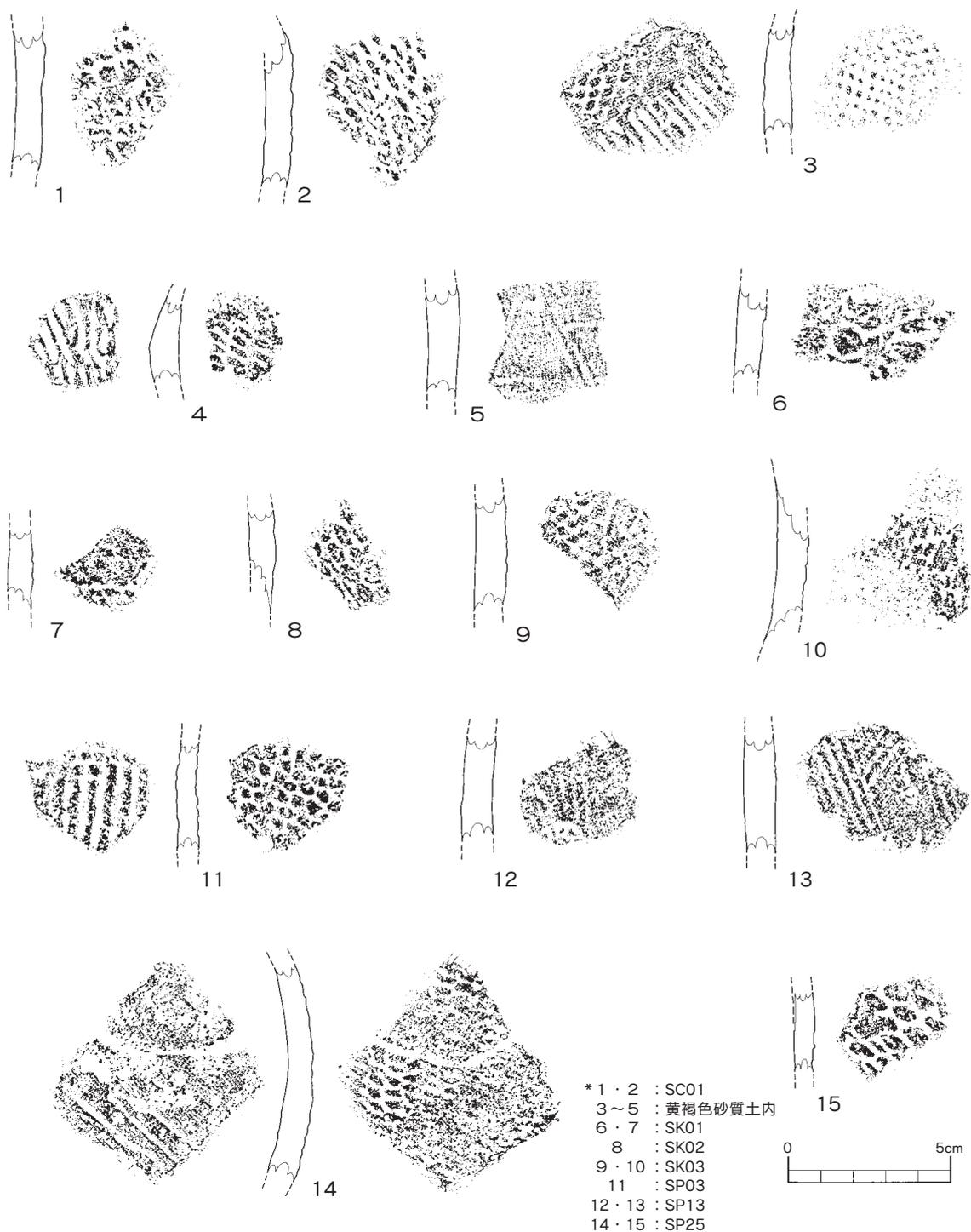
今回の調査区は、元々北西端の谷部を含めて設定していた。冒頭で記したとおり、傾斜部分と谷の落ち込み部分から遺構が検出されなかったことから、本調査の対象からは除外した。しかし、遺構検出面の傾斜記録は行なっているため、ここでこの地形変換点について若干の記述を行なっておきたい。

調査前の遺跡地は北西に向かって台地が崖状に落ち込んだ地形で、これは表土掘削後の様子と何ら変わりはない(巻末図版14-⑦・第1図)。但し、傾斜部分の遺構検出面は黄褐色粗砂の非常にもろい地盤であり、褐色～黄褐色ロームの調査区東側の状況とは大きく異なる。また谷の落ち込み部分は青灰色のしまりの悪い粘質土が基盤層として検出され、掘削開始段階から湧水が目立った。井上小松山遺跡3の成果から、現在遺跡地の南西から東へわずかに入り込む谷地形は、井上小松山遺跡3の南部分まで延長することが判明しており、谷の底部が今回試掘を行なった遺跡地北西の谷部分と同じ地質・状況を示す可能性は高い。小郡市においては、このような谷地形は弥生時代前期から湧水を利用した水田として使用される例が多く、今後の北西への延長部の調査に期待が持たれる結果となった。

f. 遺構検出面出土の縄文土器について

本遺跡における遺構の掘り込み面は、調査区中央の東西方向を境界として、その南半部には黄褐色砂質土が堆積しており、その内部からは縄文土器の細片・石器類が少量ではあるが出土している。平成18年度現在、小郡市においては明確に縄文時代の所産と確認できる遺跡・遺構は検出されていないが、遺物については市内各所で確認されている。井上小松山遺跡の近くでは、花立山の麓である干潟・干潟向畦ヶ浦の両遺跡の例がある。今回の出土も包含層からではあるが、主なものを図示し、報告しておく。

詳細については紙幅の都合上省略するが、いずれも細片のため器種や上下方向は不明なものが多い。



第26図 井上小松山遺跡4 出土縄文土器 (S=1/2)

主体は押型文を施したもので、内面は施文せず外面のみに横方向の押型文を施すタイプが最も多い。その他にも条痕文の可能性のある古手のものから、塞ノ神式と見られる新しいタイプのものが混在した状況にある。比較的時期幅が広いことから、縄文時代の遺跡の存在を示唆すると思われるが、同時に弥生時代に集落が大規模に展開する小郡市域においては、その際に跡形もなく破壊された可能性のほうが高いとも考えられる。この他にも図版16に示した黒曜石製の石鏃が同じ黄褐色砂質土内から出土している。

V. 調査成果のまとめ

1. 井上小松山遺跡3について

井上小松山遺跡3の調査では、遺構の時代・内容とも多様な成果が得られた。個々の詳細は報告の通りである。ここでは、遺跡の変遷について整理しておく。

弥生時代

井上小松山遺跡3は、黒曜石の剥片が表土掘削の段階や遺構検出の際に数点だけみられたが、とくに遺構を伴うものではなく、弥生時代中期後半から遺跡の形成が始まる。今回の調査区では西寄りに集中しており、台地の先端付近に位置する。調査では土坑やピットなどしか確認できなかったが、一般的に考えれば集落の一部に相当すると考えるのが適当だろう。

検出した遺構の中では、祭祀土坑2基が特筆され、K10では階段掘りの形態から、従来指摘されている立柱儀礼に関わる遺構であると推定できる。ここからは柱を立てた際の根石かと推定される石材が半分ずつに割れた状態で出土している。この石材より上層では多数の土器片が折り重なるように出土した。この土器群については、祭祀に伴う遺物とみてよいのだろうが、立柱儀礼執行時の遺物であるか、遺構を放棄する際に行われた祭祀の遺物であるかなど、どの時点・段階での遺物であるかの特定はできない。

また、K7でも立柱後の土器廃棄の様相が認められ、同じ地点で立柱儀礼が複数回行われたことが判明した。K7の場合には、遺構の半分が植樹の際に抉られてしまっているが、幸いにも柱の痕跡が残っていた。土層等の観察から、柱を抜き取る際に遺構の上部を少し土坑状に掘り広げ、穴を埋める段階で祭祀に使用した土器を廃棄したものと推定される。

なお、K7とK10の埋土中には、ともに1～3cm大の炭が比較的多く含まれていた。炭は周辺の土坑やピットではほとんど皆無に等しく、混入したというものではない。したがって、祭祀では火を使用していた可能性が高いといえよう。

ところで、今回の調査区内では同時期の住居跡を確認することができなかったが、井上小松山遺跡4では同じ弥生時代中期後半ごろの住居が確認されている（本書掲載）。

古墳時代

弥生時代中期の集落は短期間のうちに終焉を迎えたようで、これから述べる古墳時代住居の埋土中に1点だけ袋状口縁壺の口縁部が包含されていたが、これは明らかに混入によるものであり、直接遺構とは関係がない。したがって、中期後半以降は別の場所へ集落が移動したようである。

その後、古墳時代初頭ごろになって再び集落が営まれるようになる。確認できた遺構は、5軒の竪穴住居跡と複数のピットのみで、なかには柱穴らしきピットも含まれるが規則的な配置ではなく、何らかの構造物を示す様子は窺えなかった。むしろ、調査区周辺に広がっている可能性もある。

さて、5軒の竪穴住居跡をみると、概ね等高線に沿って水平に営まれていることがわかる。各住居から出土した土器による限り、5軒ともそれほどの時期差があるとはいえ、概ね短期間のうちに造営されたものと推定される。規模を比較すると、C1・C4・C5が大型、C2・C3が小型に分類できる。各々の距離や標高による位置関係からすると、C1とC3、C2とC4とがセットになる可能性があり、大型と小型の住居がセットになっていたようである。そうした場合、あくまで想像であるが大型に分類できるC5にも小型の住居が付随していた可能性が想定できる。

なお、上記の集落とは時代が異なるが、古墳時代後期ごろかと推定される2間×2間の総柱の掘立

柱建物が1棟存在する。直接時期を判断する遺物が皆無であるのが難点で、あるいは4地点の弥生時代住居と同時代の可能性もある。したがって、この建物の位置付けについては将来に委ねたい。

古 代

古代に位置づけられる遺構は火葬墓のみである。調査区のちょうど中央付近に単独で営まれており、周辺には何らの関連施設も存在しない。ただ、古墳時代住居C1の埋土中から概ね同時期と推定される土師器杯や甕などが出土している。両者に有機的な関係が存在するのかどうかは定かでない。

以上のように、今回の調査では弥生時代中期後半、古墳時代初頭、古代と大きく三時期の遺構を確認できたが、それぞれの間には断絶期があった。むしろ、どの時期の遺構も短期間のうちに終焉を迎えており、火葬墓にいたってはわずか1基のみが単発的に営まれたただけであった。近辺にそれぞれの間を埋める集落なり墓地が存在するはずであるが、この点に関しては今後周辺の発掘調査の成果とあわせて分析を進める必要があるだろう。

2. 井上小松山遺跡4について

井上小松山遺跡4においては、隣接する3地点とは一転して弥生時代中期後半から末にかけての時期に限定された遺構・遺物が確認された。詳細は前章で報告済であるため、ここでは隣接する井上小松山遺跡1～3との関連を踏まえて歴史的概観を記す。

弥生時代

円形竪穴住居は出土遺物や規模から、日常生活に使用したものと言うよりは特殊な事例のための建物と考えるべきであろう。また規模こそ小型になるが、3地点と同様に土器の出土を伴う祭祀土坑や立柱儀礼と関わる可能性のある土坑も検出されている。これらは同一集団の構築した一連の遺構と考えて何ら問題はないと思われる。またこの集団の生活域はこの台地上のみであろうが、その生産域については北西から南にかけての谷地形部分に営まれた可能性が高いと考えられる。但し、集落そのものは継続することなく弥生時代中期のみで廃絶しており、その後は1点土器が出土しているだけであるが、この地域が狩猟の場として使用されたと想定される。

古墳時代

古墳時代にいたると、本遺跡内においては遺構・遺物は混入品も含めて全く確認されていない。また近接する井上小松山遺跡1・2でも古墳時代の遺構・遺物は検出されておらず、後世の造成に伴う削平の可能性も薄い。両遺跡と井上小松山遺跡3の間については、遺跡の存在そのものが確認されていない。つまりこの時期に形成された集落の西端は井上小松山遺跡3・4の境界上に、東端は遺跡の東端に存在し、集落そのものは南側へのみ延長していた比較的小規模なものであると考えられる。

古 代

古代についても井上小松山遺跡4においてはその所産と思われる遺構は検出されていない。遺物については北西端崖面の表土掘削時に内面に布目痕の残る丸瓦片が出土したのみである。この時期の遺跡としては西に広がる井上集落内の井上廃寺が著名であるが、明確に遺構に伴う遺物ではないため、本遺跡および井上小松山遺跡3との関連は不明である。井上小松山遺跡1においては調査区南端でやはり内面布目痕跡の瓦が出土した古代の溝と土壇墓を検出しており、そのさらに南に隣接して瓦の表採が確認されている北薬師堂遺跡が所在していることから、古代集落の主体はその近辺と推察される。



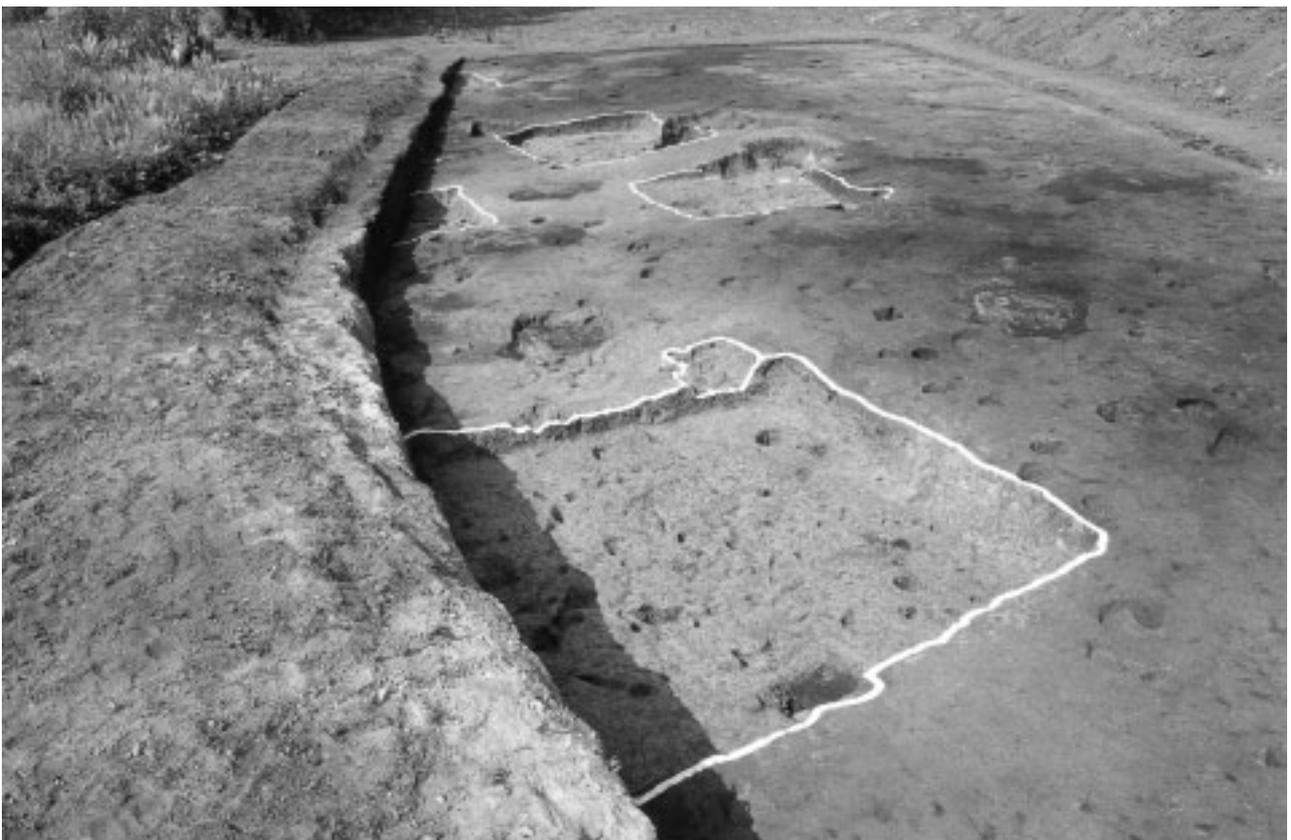
①井上小松山遺跡3 調査区遠景（東から）



②井上小松山遺跡3 調査区全景（直上から、写真上方が南）



① 竪穴住居集中箇所（直上から）



② 竪穴住居集中箇所（南東から）



① 1号祭祀土坑 遺物出土状况



② 1号祭祀土坑 完掘状况



③ 2号祭祀土坑 遺物出土状况



④ 2号祭祀土坑 完掘状况



⑤ 6号土坑 土层断面



⑥ 6号土坑 完掘状况



⑦ 8号土坑 土层断面

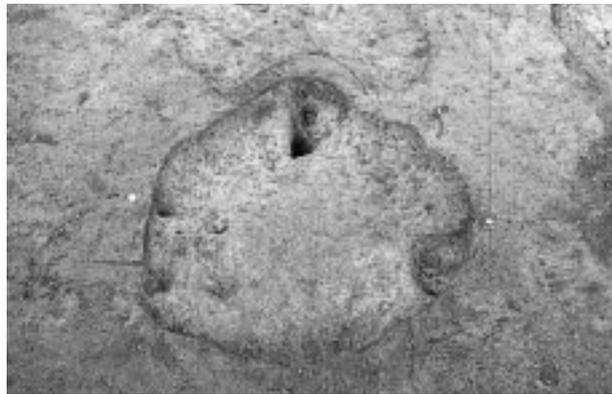


⑧ 8号土坑 完掘状况

图版4



① 3号土坑 土层断面



② 3·4号土坑 完掘状况



③ 5号土坑 土层断面



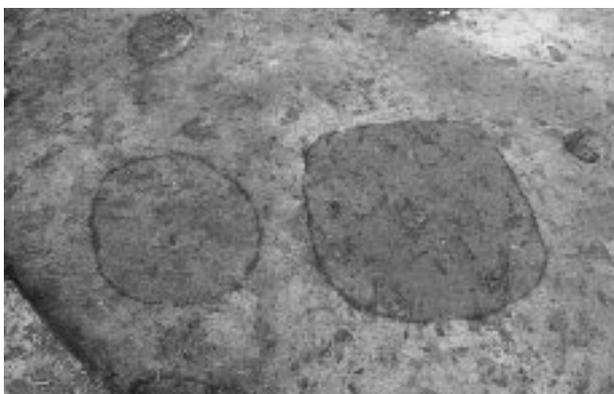
④ 5号土坑 完掘状况



⑤ 6号土坑 土层断面



⑥ 6号土坑 完掘状况



⑦ 8·9号土坑 检出状况



⑧ 8号土坑 土层断面



①9号土坑 土层断面



②10号土坑 検出状況



③11号土坑 土层断面



④12号土坑 土层断面



⑤13号土坑 土层断面



⑥14号土坑 土层断面



⑦15号土坑 土层断面



⑧20号土坑 土层断面



①不明土坑 土层断面



②不明土坑 完掘状况



③1号竖穴住居 检出状况



④1号竖穴住居 完掘状况



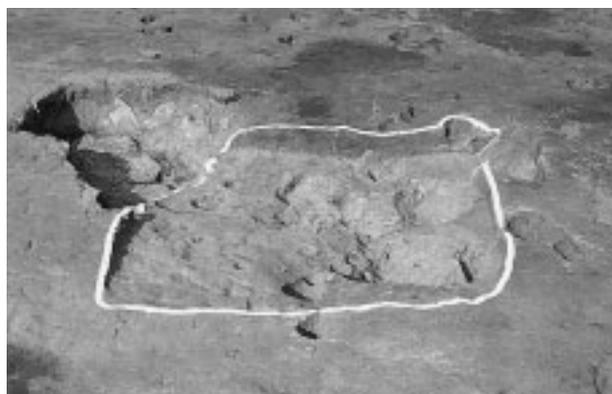
⑤1号竖穴住居屋内土坑 遗物出土状况



⑥1号竖穴住居屋内土坑 完掘状况



⑦2号竖穴住居 遗物出土状况



⑧2号竖穴住居 完掘状况



① 3号竖穴住居 掘削状况



② 3号竖穴住居 完掘状况



③ 4号竖穴住居 土层断面



④ 4号竖穴住居 完掘状况



⑤ 4号竖穴住居 遗物出土状况



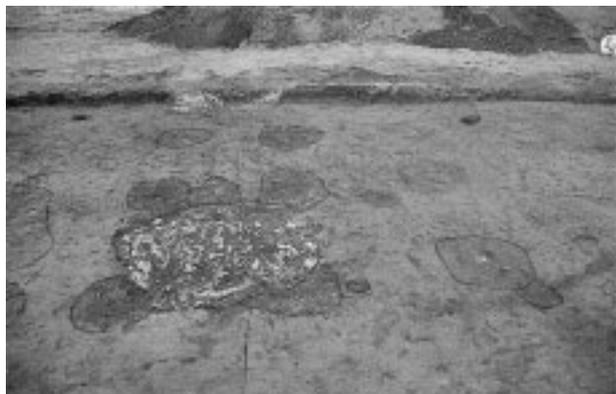
⑥ 5号竖穴住居 检出状况



⑦ 5号竖穴住居 完掘状况



⑧ 5号竖穴住居 遗物出土状况



①掘立柱建物 検出状況



②掘立柱建物 完掘状況



③掘立柱建物 土層断面 (1)



④掘立柱建物 土層断面 (2)



⑤掘立柱建物 土層断面 (3)



⑥掘立柱建物 土層断面 (4)



⑦火葬墓 完掘状況

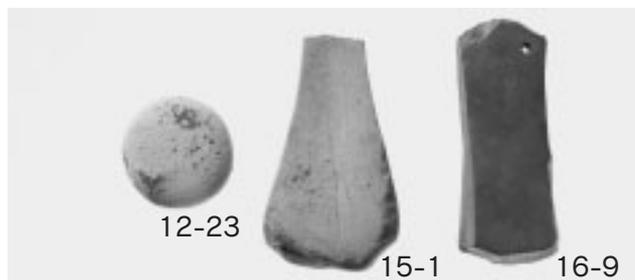
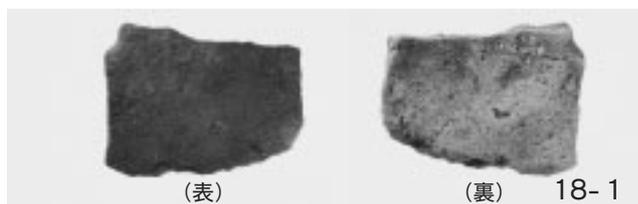


⑧火葬墓 遺物出土状況



井上小松山遺跡3 出土遺物(1)

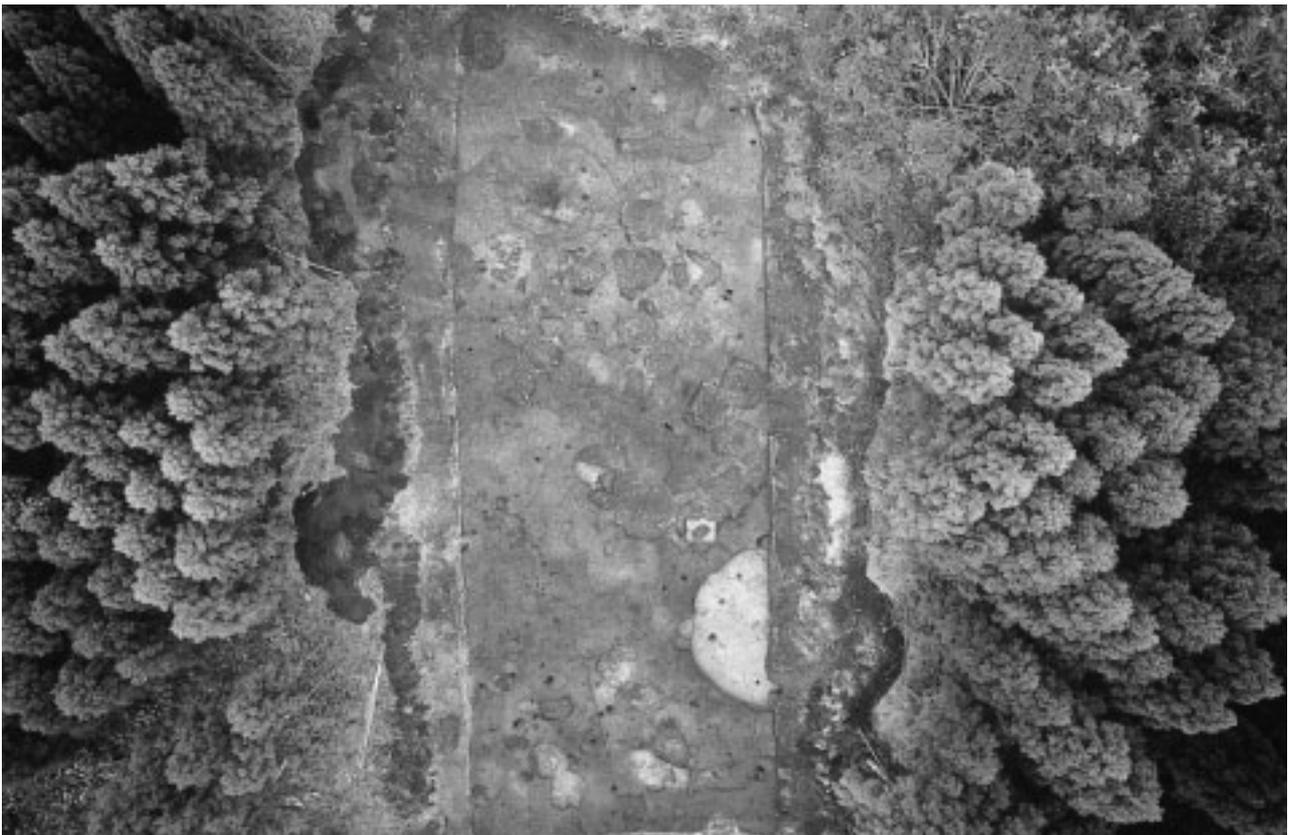




井上小松山遺跡3 出土遺物 (3)



①井上小松山遺跡4 調査区全景（南東から）



②井上小松山遺跡4 調査区全景（直上から）



① 円形竪穴住居 土層断面



② 円形竪穴住居屋内土坑 土層断面



③ 円形竪穴住居屋内土坑 遺物出土状況



④ 円形竪穴住居 遺物出土状況 (1)



⑤ 円形竪穴住居 遺物出土状況 (2)



⑥ 円形竪穴住居 完掘状況



⑦ 1号土坑 土層断面



⑧ 1号土坑 完掘状況



①2号土坑 遺物出土状況



②2号土坑 土層断面



③1号落とし穴状遺構 土層断面



④1号落とし穴状遺構 完掘状況



⑤2号落とし穴状遺構 土層断面



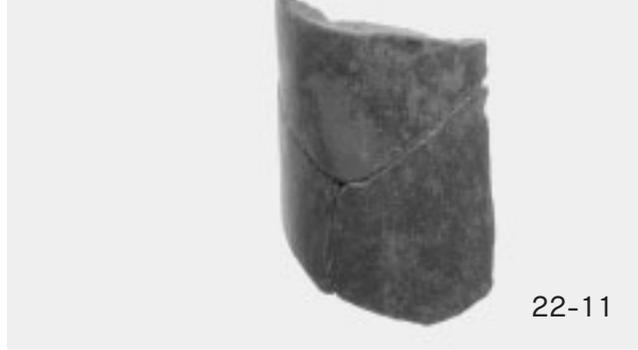
⑥調査区北西斜面 遺構検出状況



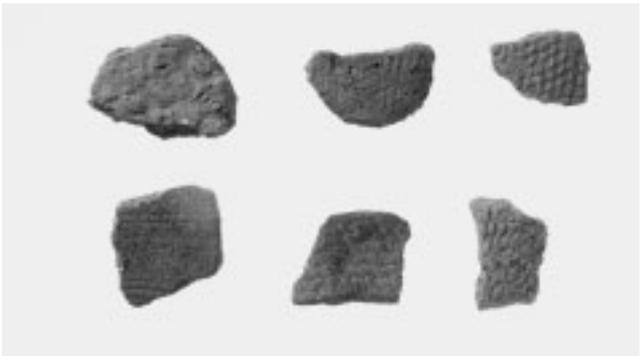
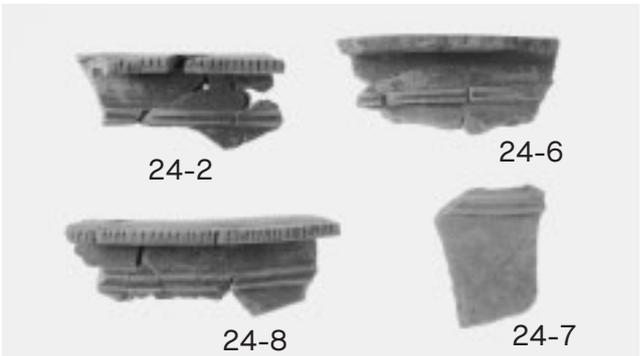
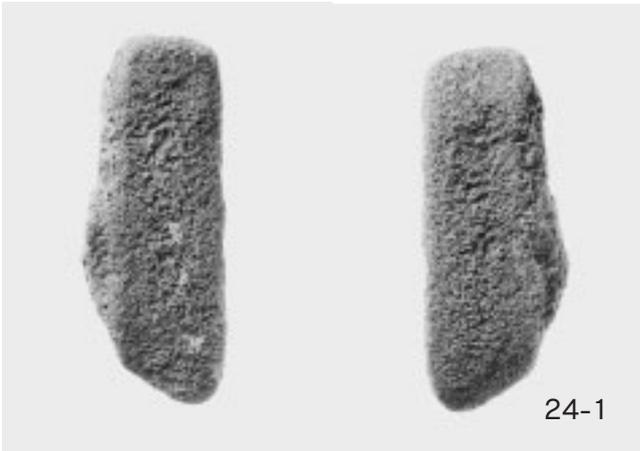
⑦調査区から下鶴の集落を臨む



⑧調査風景



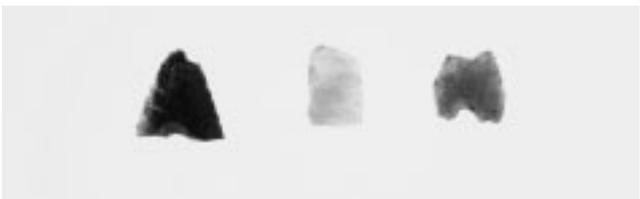
井上小松山遺跡4 出土遺物 (1)



縄文土器 (1)



縄文土器 (2)



黄褐色砂質土内出土石器類

井上小松山遺跡4 出土遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いのうえこまつやまいせき							
書名	井上小松山遺跡3・4							
副書名	福岡県小郡市井上所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第227集							
編著者名	下原幸裕・上田 恵・杉本岳史							
編集機関	小郡市教育委員会							
所在地	〒838-0198 福岡県小郡市小郡255-1 Tel. 0942-72-2111							
発行年月日	2007(平成19)年3月31日							
保管場所	〔写真・図面・遺物〕小郡市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 Tel. 0942-75-7555							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いのうえこまつやまいせき 井上小松山遺跡3	おごおりしいのうえ 小郡市井上	40216		33° 24' 14"	130° 34' 52"	20050916 ~ 20051214	1,266m ²	大保・今隈 10号線 道路改良 工事
いのうえこまつやまいせき 井上小松山遺跡4	おごおりしいのうえ 小郡市井上	40216		33° 24' 14"	130° 34' 52"	20061004 ~ 20061221	450m ²	大保・今隈 10号線 道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
井上小松山遺跡3	集落 墓地	弥生 古墳 古代	祭祀土坑・土坑 竪穴住居 掘立柱建物 火葬墓		弥生土器・石器 土師器・石器・鉄器 須恵器 土師器・人骨			
井上小松山遺跡4	集落	弥生 弥生・古墳 古墳	竪穴住居 土坑 土坑		縄文土器・弥生土器 弥生土器・石器 土師器			

井上小松山遺跡3・4

小郡市文化財調査報告書 第227集

2007（平成19）年3月31日

発 行 小郡市教育委員会
埋蔵文化財調査センター
福岡県小郡市三沢5147-3
Tel.(0942)75 - 7555

印 刷 株式会社 三 光
福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4
Tel.(092)475 - 6271